

# 桂川甫賢筆ヒポクラテス像の賛、新出二種の典拠について

松田 清

## はじめに

日本でヒポクラテス（前四六〇頃～前三七五頃）が医聖として初めて認識され、尊崇の対象となったのは、大槻玄沢が『重訂解体新書』（寛政十年・一七九八成）において、原典のクルムス『解剖学図表』オランダ語版（一七三四）の脚注からヒポクラテス略伝を訳出したことに始まる。以来、明治初年まで、蘭方医、蘭学者の社会でヒポクラテス像が流行し、漢方医が医薬の祖として神農像を祭るように、西洋医学の祖として崇められてきた。

江戸時代にヒポクラテス像をもっとも多く描いたのは将軍家侍医桂川甫賢（国寧、寛政九年～弘化元年、一七九七～一八四五）であった。本草学に造詣が深く、商館長ドゥーフからボタニクス（Botanicus、植物学者の意）の名を与えられた

甫賢は、また画才にも恵まれ、博物画、人物画に優れていた。西洋人ではヒポクラテスを特に好んで描いた。<sup>1)</sup>

江戸時代から明治初期までに描かれたヒポクラテス肖像画の集大成である緒方富雄（一九七一）によつて、これまで知られている桂川甫賢自画自賛のヒポクラテス肖像を挙げれば、次の七点にのぼる。<sup>2)</sup> 賛の種類と緒方富雄が明らかにした典拠、および甫賢の落款とともに、成立年月順に甫賢の年齢を添えて、以下に示す。太字のアラビア数字は同書の写真図版番号である。

① 10 文化十三年（一八一六）三月 二十歳

蘭文賛 クルムス『解剖学図表』オランダ語版脚注（ヒポクラテス略伝）の引用。

漢文賛 蘭文賛の甫賢訳。「ゴルムス古尔摸私解体書云」「文化丙子

三月桂国寧写并題」

② 文化十三年（一八一六）八月 二十歳

蘭文賛 クルムス『解剖学図表』オランダ語版脚注（ヒポクラテス略伝）の引用。

漢文賛 蘭文賛の甫賢訳。「鳩児誤私曰」「文化十三丙子仲秋 奉朝請医官桂川甫賢国寧写并題」

③ 文化十三年（一八一六）八月 二十歳

蘭文賛 クルムス『解剖学図表』オランダ語版脚注（ヒポクラテス略伝）の引用。

漢文賛 蘭文賛の甫賢訳。「鳩児誤私曰」「文化十三丙子仲秋 奉朝請医官桂川甫賢国寧写并題」

④ 20 文政二年（一八一九）九月 二十三歳

蘭文賛 クルムス『解剖学図表』オランダ語版脚注（ヒポクラテス略伝）の引用。

漢文賛 大槻玄沢訳「兮撥哈拉跼斯伝」（寛政十一年八月）冒頭からの引用。「文政己卯季秋 梅街桂国寧写并題」

⑤ 23 文政九年（一八二六）一月 三十歳

蘭文賛 Josiwo Tuziro（吉雄忠次郎）署名蘭文（吉雄忠次郎は天文台詰通詞）

漢文賛 なし。「丙戌孟春 桂桂嶼拜写」

⑥ 27 天保九年（一八三八）五月 四十二歳  
蘭文賛 なし。

漢文賛 大槻玄沢訳「兮撥哈拉跼斯伝」および山村才助

訳・大槻玄沢訂「依卜加拉得斯略伝」（文化四年春）をもとに甫賢編集。「天保戊戌夏五 翠藍桂

国寧敬写并書」

⑦ 28 天保十二年（一八四一）十月 四十五歳  
蘭文賛 なし。

漢文賛 大槻玄沢訳「兮撥哈拉跼斯伝」および山村才助訳・大槻玄沢訂「依卜加拉得斯略伝」（文化四年春）をもとに甫賢編集。「天保十二年龍集辛丑子

春念五為嵐山詞兄之囑 翠藍山樵桂国寧真桂」

（嵐山詞兄は平戸藩医六代嵐山甫庵）

二〇二〇年三月、これまで知られてこなかった桂川甫賢筆ヒポクラテス肖像画（図1）が出現した。京都の衆星堂発行『衆星堂古書目録 庚子姑洗』（二〇二〇年三月一日発行）掲載の「医聖依卜加得像」一幅である。文政七年（一八二四）に甫賢が自画自賛したもので、紙本着色、本紙一三四cm×五七・一cm、総丈一九三cm×六一・九cmの軸装。成立時期は既知の右記④と⑤の間に位置する。

肖像の下部に蘭文賛、上部に漢文賛を配し、蘭文賛には甫賢自筆の蘭文署名、漢文賛には甫賢の落款がある。蘭文賛はヒポクラテスの箴言「医術ハ長ク、命ハ短イ」の引用に始ま

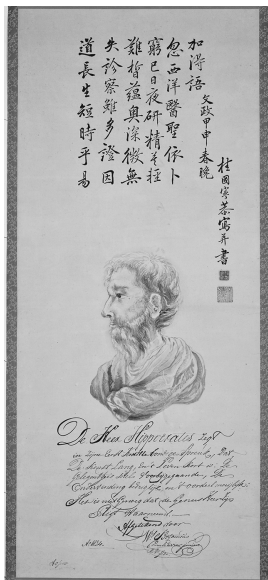


図1 医聖依ト加得像 衆星堂蔵

り、漢文賛はその漢訳のようにみえる。このヒポクラテス箴言は⑤23文政九年の吉雄忠次郎の蘭文賛にも引用されているが、今回の蘭文賛はそれに先立ち、内容的にも異なる。

同じ二〇二〇年三月、この「医聖依ト加得像」画幅と別に、桂川甫賢著「依ト加得文章一」と題する転写本一冊が、うぶの状態で古書市場に出現した。虫損がひどく、四周に焼け焦げた跡が残っていたが、現在は裏打ちされている。寸法は縦二四・八cm、横一七cm。右結び綴じ。表紙共全六丁。表紙の小口寄り中央に「依ト加得文章一」と墨書し、表紙見返しに水彩のヒポクラテス肖像画が楕円形（縦一六・三cm、横一一・二cm）の額内に摸写されている（図2）。

本文の漢文（白文）は前半と後半に別れ、前半は、上掲⑥27天保九年（一八三八）五月成立の漢文賛とほぼ同文であ



図2 依ト加得文章一 口絵と本文冒頭 神田外語大学日本研究所蔵

る。後半は肖像画の由来書で、末尾に「時惟天保戊戌端午之日也 江都法眼侍医 翠藍桂国寧」と同じ天保九年、しかもより詳しく「端午之日」（五月五日）の落款が写されている（図3）。表紙見返しにの肖像模写図も⑥27の肖像と酷似している。したがって、この小冊子は甫賢自筆本ではないが、⑥27の成立事情を説明するうえで貴重な資料である。

本稿は、以上の新出資料二種、「医聖依ト加得像」および「依ト加得文章一」の賛の成立過程を、当時の各種ヒポクラ

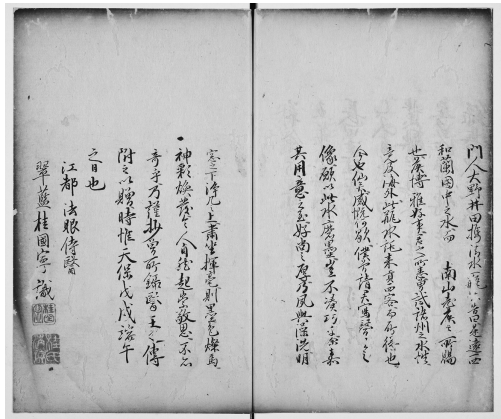


図3 依卜加得文章一 末尾（依卜加得肖像由来書）  
神田外語大学日本研究所蔵

テス伝との関連、典拠となったオランダ語原文との照合を通して分析し、甫賢のヒボクラテス観を考察することを目的とする。

### 1 「医聖依卜加得像」の蘭文賛

本図は甫賢が文政七年（一八二四）、二十八歳の作。肖像画の典拠は不明であるが、実際に西洋人を写生した印象を与

える。賛は蘭文と漢文の二つあり、いずれも自賛である。蘭文賛（図4）はヒボクラテスの有名な箴言「医術ハ長ク、命ハ短イ」とともに、日本で初めてヒボクラテスの臨床医学思想を紹介したものとして、貴重である。翻刻と和訳は左記の通り。年号の左下の書き入れ「Aojeno」は未詳のため、和訳では省略した。

De Heer Hippocrates zegt  
in Zijne Erst Kortste bondige Spreuk. Dat  
De konst Lang, en 't Leven kort is: De  
Gelegentheid snel voorbijgande, De  
Ondervinding bedrightsich, en 't oordeel moeijijk:  
Het is niet Genoeg dat de Genees Heer Zijn  
Piigt Waarneemt  
Afgetekend door  
W. Botanicus  
of  
Caneelrivier junior.  
A:91824 M:D: in  
Aojeno Jedo.

(和訳)

ヒボクラテス氏、その箴言の第一に曰く、  
医師は長く、生命は短かい。

好機は早く過ぎ去り、

経験は欺きやすく、診断は難しい。

医師がその義務に従うだけでは  
不十分である、と。

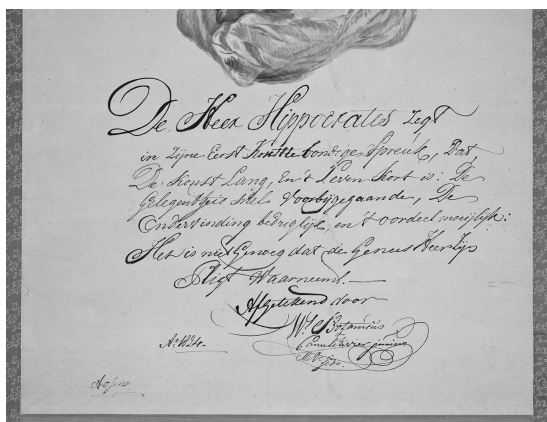


図4 医聖依卜加得威 蘭文賛 衆星堂蔵

W・ボタニクスまたは江戸の医師桂川二世画  
一八二四年

#### オランダ語版『ヒボクラテス箴言集』

典拠を示す第一行の「in Zijne Erst Kortste bondige Spreuk」は in Zijne Erste Kortbondige Spreuk と綴るべきところを誤っているが、「その第一箴言に」の意味である。原典のオランダ語版『ヒボクラテス箴言集』の原タイトル Aphorismen, of kortbondige spreuken van Hippocrates はギリシア語・ラテン語起源の Aphorismen (箴言) を冠し、of (すなわち) kortbondige spreuken (簡明なる名言) と双解している。Aphorismen はハルマやマーリンの蘭仏辞典、大江春塘編『バスタールド辞書』(一八二二)の見出し語になっていたため、甫賢はその意味が分からなかったかもしれない。<sup>4)</sup>

オランダ語版『ヒボクラテス箴言集』はアムステルダム  
の医師ステファヌス・ブランカールト (Stephanus Blankart、  
一六五〇―一七〇四) の翻訳になり、初版 (Amsterdam,  
Jacob van Royen, ca. 1680)、第二版 (Amsterdam, Nicolaas  
ten Hoorn, 1714; Rotterdam, Hermannus Kentink, 1737) の  
アムステルダム版<sup>5)</sup>、一七九二年のゲント版 (Gent, Adrianus  
Coller, 1792)<sup>6)</sup> の三種がある。

アムステルダム版の銅版口絵は初版、第二版とも同工のヒ

ポクラテス立像だが、ゲント版の口絵のヒポクラテス像は円形メダル内に右横顔（画面右向き）を描き、頭上に「HIPPOCRATES」の文字を配している。台座には「Dis heeft onz Griekenland / HIPPOCRATES gegeven. / wier Geest eeuw uit eeuw in, zal in zín schriften leven.」（このようにして我等がギリシアはヒポクラテスを生んだ。その靈魂は世紀から世紀へその著作のなかに生き続けるだろう）との碑文を刻し、図版右下に彫刻師の銘「P.T.berghien Sculp.」が見える。

各版の本文に構成上の大きな差異はない。手元の第二版ロッテルダム版（個人蔵、図5、図6）はアムステルダム版の標題紙に新しい刊記ラベルを貼り付けて出版されているが、口絵、本文とも同一版である。その書誌は以下の通り。

Aphorismen. Of Kortbondige Spreuken Van Hippocrates, Benefens desselvs Wet En Onderrichtingen. Met een bequaam Register, en Woordboekje voorzien. Nevens d'Aanmaningen van den Heer N. Tulp. Vertaalt door S. Blankart. M.D. tot Amsterdam. Tweede Druk. Te Rotterdam. By Hermannus Kentlink. Boekverkooper. 1737. [Te Amsterdam. By Nicolaas ten Hoorn. Boekverkooper. 1714.]

Engraved frontispiece (statue of Hippocrates with

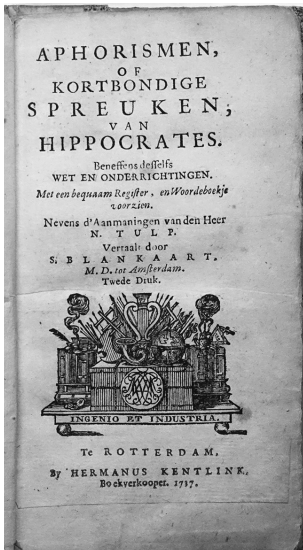


図6 ヒポクラテス箴言集 第二版 標題紙 個人蔵

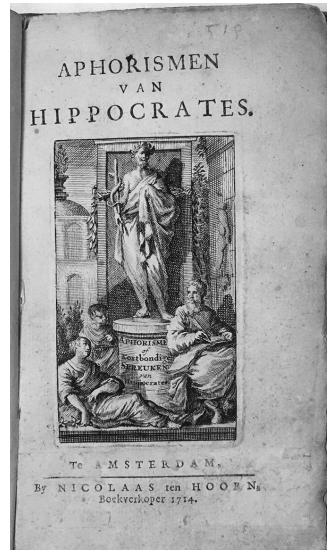


図5 ヒポクラテス箴言集 第二版 口絵 個人蔵

imprint: 'Te Amsterdam. By Nicolaas ten Hoorn.  
Boekverkooper. 1714), title page. (8), 201, (3) pp. 15.5 x 9 cm.  
口絵と標題紙のあとに続く内容の構成は次の通りである。  
序文類はない。

「ソラヌスによるヒポクラテスの家系と生涯」(Het  
Geslacht en Leven van Hippocrates volgens Soranus.  
\*3r-6v.)

「ヒポクラテスの箴言」(Kortbondige Spreuken van  
Hippocrates. pp.1-92) 全八章

「箴言索引」(Aanwyser over de Aphorismen. pp. 93-141)

「ガレヌスのヒポクラテス評」(Galenus in het boek der  
Ordeeldagen. p. 142.)

「ヒポクラテスの法則」(De Wet van Hippocrates. pp. 143-  
146.)

「ヒポクラテスの教説」(Onderrichtingen van Hippocrates.  
pp. 147-159.)

「ヒポクラテスの解毒剤」(Hippocrates. Tegengift. pp.  
160-162.)

「箴言中の術語解説」(Kunstwoorden in de Aphorismen.  
pp. 163-189.)

「N.テュルプ氏の医戒」(Geneeskundige Vermaningen  
van den Heere N. Tulp. pp. 190-200.)

「パレウスの外科則」(Heelkundige Regels van Pareus.  
pp. 201-[204].)

ソラヌス(後一世紀末〜後二世紀前半)はヒポクラテス伝  
を著したローマ帝政期のギリシア人医学者である。N.テュ  
ルプ(Nicolaas Tulp, 一五九三〜一六七四)はアムステルダ  
ムの外科医で解剖学を講義。ヒポクラテスの熱烈な信奉者  
だった。パレウスは近代外科学の創始者として知られるフラ  
ンスの宮廷外科医アンブローズ・パレ(Ambroise Paré,  
一五〇〇〜一五九〇)のラテン名 Ambrosius Pareus にちなむ。  
書中「ヒポクラテスの箴言」は全八章からなり、各章二十  
乃至八十三の箴言には独立した一連番号が付けられている。  
桂川甫賢筆ヒポクラテス肖像画の蘭文賛は二十五の箴言から  
なる第一章(Eerste afdeling)の第一箴言を典拠としてい  
る。

### 典拠の版種

第一箴言のテキストはアムステルダム版・ロッテルダム版  
とグェント版の間で一部異同がある。第二版の第一箴言(本文  
冒頭)は図7の通りである。アムステルダム版第二版(1714)

とゲント版 (1792) の両テキストと甫賢の蘭文賛を比較すると、ゲント版の第一箴言には新たに「de ondervindinge bedriegelyk en de uytkomst onzeker.」(経験は欺きやすく、結果は不確実である) の語句が加わっており、しかも、蘭文賛はこの語句の前半「de ondervindinge bedriegelyk」を採用していることが分かる。

また、蘭文賛の後半「Het is niet Genoeg dat de Genees Heer Zijn/Pligt Waarneemt.」(医師がその義務に従うだけでは不十分である) は、箴言の対応する原文「Een Medicyn nu moet niet alleen syn best doen om te betrachten, het gene ontrent den zieken gedaan moet worden」(医師が患者について為されるべきことを最善を尽くして実践するだけでなく) を要約したため、その原意を損ねている。

以下、甫賢が明らかにゲント版によって蘭文賛を作成したことを示すため、ゲント版のテキスト中、採用された語句全体を太字にし、要約され意味を弱められた箇所をイタリックで示し、両テキストを対比させよう。下線部はゲント版に追加された語句である。和訳は重複を恐れず、両テキストに付けた。

(Amsterdam, 1714 : )

1. Het leven is kort, de konst lang, de gelegentheit snel, de

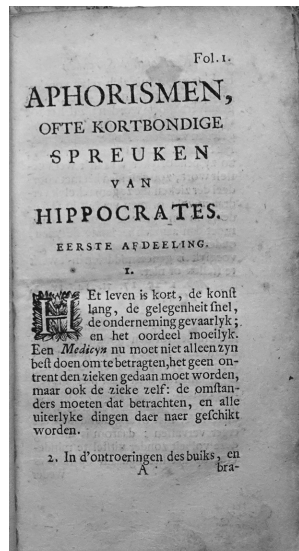


図7 ヒポクラテス箴言集 第一箴言 個人蔵

onderneming gevarlyk: en het oordeel moeilyk. Een Medicyn nu moet niet alleen syn best doen om te betrachten, het geen ontrent den zieken gedaan moet worden, maar ook de zieke zelf, de onstanders moeten dat betrachten, en alle uiterlyke dingen daer naer geschikt worden.

(和訳)

命は短く、医療は長く、好機は早く去り、実験は危うく、診断は難しい。医師が患者について為されるべきことを最善を尽くして実践するだけでなく、患者自身も介助者もそれを実践すべきである。そして外的事物すべてがそれに向けて整えられねばならない。

(Gent, 1792 : )

1. Het leven is kort, de konst lang, de gelegentheyd snel,



de onderneeming gevaerlyk; en het oordeel moeylyk: de ondervindinge bedriegelyk; en de uytkonst onzeker. *En Medicyn nu moet niet alleen syn best doen om te betrachten, het gene ontrent den zieken gedaan moet worden, maer ook de zieke zelf: de omstraenders moeten dat betrachten, en alle uytterlyke dingen daer naer geschikt worden.*

(和訳)

命は短く、医療は長く、好機は早く、実験は危うく、診断は難しい。経験は欺きやすく、結果は不確実である。医師が患者について為されるべきことを最善を尽くして実践するだけでなく、患者自身も介助者もそれを実践すべきである。そして外的事物すべてがそれに向けて整えられねばならぬ。

原文冒頭の「命は短く、医療は長く」(Het leven is kort, de konst lang)を蘭文賛<sup>23</sup>は、接続詞だに続く従属節のなかで語順を逆転させ、「医療は長く、生命は短く」(Dat De konst Lang, en 't Leven kort is)としている。甫賢がde konstを強調するために、これを前置したことが明らかである。また、原文の末尾で、患者も介助者も最善を尽くし、周囲の環境整備も必要<sup>24</sup>である、と説く部分は、蘭文賛<sup>23</sup>は省略されている。こうした語順の変更や文章の省略の意味は漢文賛によって明らかになるように思われる。

#### 吉雄忠次郎の蘭文賛

ヒボクラテスの箴言「医療ハ長く、命ハ短イ」を引用した蘭文賛のあるヒボクラテス肖像画は、従来、桂川甫賢が文政九年(一八二六)年一月に描いた肖像画に、天文台詰吉雄忠次郎が蘭文賛を入れた、上掲<sup>⑤</sup>23だけが知られていた。それに先立ち甫賢筆「医聖依卜加得像」の出現によって、この吉雄忠次郎の蘭文賛の成立事情を推定することができる。緒方富雄(一九七一)23による蘭文賛の翻刻に逐語訳を付けければ、次の通りである。

De geneeskunst is Zeer uitgestrekt. Het groot Getal en de Verscheidenheid der deelen, die het menschelijk Lichaan Zamenstellen: De meenigte van Zaken, die het konnen beleeiden. En de onderscheidene middelen die men moet Gebruiken, om alle de Wanorders te herstellen. Die deze Oorzaken Konnen Voortbrengen Vereisschen Zo veel Kennis tot de Volmaking van deze Konst, dat de during van het menschelijk Leven voor den Sterksten en doordringendsten Geest noot genoeg kan zijn, om zo alle te Verzamelen. Dit is het dat den Prins der Geneeskunde deed Zeggen, dat de konst Lang en het Leven kort is.

Josiwō Tuziro

(逐語訳)

医学はきわめて広汎である。人体を集合させている部分は膨大な数にのぼり多種である。人体に危害を加えかねない事物も数多い。そして、あらゆる不正常を立て直すために用いるべき薬剤も多種に及ぶ。これらの理由のもたらす所がこの学の達成に実に多くの知識を要求するため、人間の生涯は、いかに強靱で透徹した精神にしても、それら全てを総合するには決して十分ではない。これが医王をして、医術は長く人生は短い、と言わしめた所以である。

吉雄忠次郎

注目すべきことに、ここに引用されたヒポクラテスの箴言「[dat] de konst Lang en het Leven kort is」が桂川甫賢の引用した箴言と語順も含めて全く同一である。この語順は甫賢が『ヒポクラテス箴言集』オランダ語版の語順を変えたものであり、吉雄は甫賢からこの箴言を教えられた可能性が極めて高い。そして、吉雄が箴言中の *het Leven* を医学生生の人生と解釈し、箴言を医術習得の教訓、一種の勸学文と受け止めたことは明白である。したがって、上記の逐語訳では「医術は長く人生は短い」と訳した。

『依卜加得外科則』中の第一箴言

甫賢が天保九年(一八三八)に記した「戊戌寓目録」の第四六枚裏に「○ラブランド、エゾ、熊膽、日本而及支那○依卜加行伝／ホルラントケレキナデニス 鷹見へ」、裏表紙の表に「依卜加行外科則」の覚書があるという。「依卜加行」は「依卜加得」の読み誤りにちがいない。この覚書は甫賢が寓目した蘭書の覚書と推定される。「ホルラントケレキナデニス 鷹見へ」は「ホルラントケシキーデニス」すなわち *Hollandische geschiedenis* (オランダ史、著者版種とも未詳) が蘭癖の古河藩家老鷹見泉石の所有となったことを記したものであろう。

問題の「○依卜加得伝」は、当初、『ヒポクラテス箴言集』オランダ語版冒頭の「ソラススによるヒポクラテスの家系と生涯」に、また、「依卜加得外科則」は同書末尾の「パレウスの外科則」に比定しようとしたが、どうしても無理がある。

改めて江戸時代舶載蘭書のなかで、ヒポクラテス『箴言集』蘭訳(ゲント、一七九二)以外に、ヒポクラテス略伝と『箴言集』を載せるものを探すと、ダヴィッド・ファン・ヘッセル『ヒポクラテスの外科学』(David van Gesscher, *Heelkunde van Hippocrates*. Amsterdam, J.B. Elwe, 1791.) が浮かび上がった。大槻玄沢は文化七年に長崎屋で、商館長

ドゥーフ、外科医フェイルケらと面談した際、蘭書「David van Geischer 1789, 四冊モノ」(庚午西賓対話記)を目撃して書き留めている。<sup>(8)</sup>この「四冊モノ」は玄沢の書き入れた刊年が不正確かもしれないので、同著者の『現代実用外科学』(Id. *Hedendaagsche oeffende heekunde*. Amsterdam, J. Doll, 1781-1787, 3 vols.)と上記『ヒポクラテスの外科学』の取り合わせの可能性がある。

『ヒポクラテスの外科学』の本文はヒポクラテスの『箴言集』および他の著作をもとに、外科関係の断章を編集し注解を加えたものである。著者の刊行の趣旨は、巻頭の「オランダの外科医諸子へ」(Aan de Nederlandsche heelmeesters)で、外科学の祖としてのヒポクラテス顕彰を呼びかけ、「前書ぎ」(Voorbericht)冒頭に「ヒポクラテスの外科教説の摘録と簡明な解説、これが本書で私のめざす全てである」(Eene opgave, en korte verklaring der Heelkundige Leerstellingen van Hippocrates, is alles wat ik in dit Werk bedoel; 下線は引用者)と述べているところから明らかである。甫賢が与えた書名「依ト加得外科則」の「外科則」は「前書ぎ」冒頭の語句「Heelkundige Leerstellingen」(外科教説)の訳語であろう。「○依ト加得伝」は本書巻頭の「ヒポクラテス略伝」(Levens-schets van Hippocrates)にちがいない。

本書の本文冒頭の第一箴言すなわち「ヒポクラテスの外科学／第一部／総則／第一節」(Heelkunde van Hippocrates. / *Eerste Hoofddeel. / Algemeene Leerstellingen. / §. 1.*)のテキストは、次に掲げるように、すでに検討したオランダ語版「ヒポクラテス箴言集」のアムステルダム版とも、ゲント版ともかなり異なる訳文である。特に、医師に外科医を含めるために、「医師」(medicyn)の代わりに「必要を施す者」(hy die het noodige doet)の訳語を導入している。甫賢がこのテキストを天保九年に「寓目」した可能性はある。しかし、これを利用した形跡は見つからない。

Het Leven is kort, de Kunst lang, de Gelegenheid vlugtig, de Ondervinding misleidend, het Oordeel zwaar. Niet slechts moet hy die het noodige doet, maar ook de Zieke, de Oppassers, en de uiterlyke dingen, elk het zyne toebrengen. (命は短く、<sup>(9)</sup> 医療は長く、好機は逃げやすく、経験はだましくやすく、診断は重い。必要を施す者だけではなく、また、患者、看護師、そして外的事物、それぞれがその役割を果たさねばならない。)

本書は、文久年間成立と推定される匿名の写本「蘭書抜粋録」全三冊の第一冊に、巻頭の「オランダの外科医諸子へ」

「前書き」及び「依卜加得略伝」が転写されている<sup>10</sup>。天保文久年間における本書の影響については後考を待ちたい。

## 2 「医聖依卜加得像」の漢文賛

桂川甫賢自筆の漢文賛は洋書の左開きを模して、行を左から右へ改めて書き進めている。落款の方印は図8に示す。白文方印（印文：桂國寧印）は二二mm四方、朱文方印（印文：字清遠）は縦三七×横三六mmである。漢文賛の翻刻と和訳は左記の通り。

桂國寧恭写并書（白文方印）（朱文方印）

文政甲申春晚

加得語

忽西洋医聖依卜

窮已日夜研精無輕

難暫蘊奧深微無

失診察雖多證因

道長生短時平易

（訓み下し）

道は長く、生は短し。

時たるや失い易し。

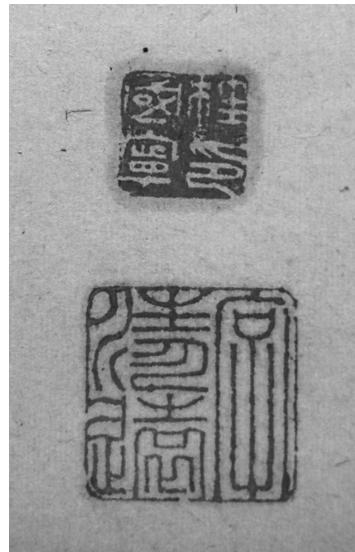


図8 医聖依卜加得像 落款印  
衆星堂蔵

診察は證因多しと雖も、蘊奥の深微を暫め難く、窮まり無くして已む。日夜研精して軽忽なる無かれ。西洋の医聖依卜加得の語なり。

漢文賛は蘭文の Konst（術、医術）を「道」と訳し、Ondervinding bedrijfsic]（経験は欺きやすい）の代わりに、「蘊奥の深微を暫め難く、窮まり無くして已む」と東洋的な観念で補強している。蘭文賛の漢訳というよりはむしろ、朱子学的な新解釈といふべきであろう。すなわち、上述のように、語順を逆転させ、Konstを強調し、むしろ「術」

ではなく「道」と訳すのは、医療を方技としてではなく、窮理のための道ととらえ、医師を職人ではなく儒医と位置づける思想によるものと考えられる。

蘭文賛の末尾「医師がその義務に順うだけでは不十分である」(Het is niet Genoeg dat de Genees Heer Zijn Plicht waarneemt) は、漢文賛と関連づけられ、医師は儒医たれ、方技だけでは不十分である、窮理せよ、という意味に変化する。箴言の原文は後半で、医師に最善を尽すという医師の倫理だけでなく、患者と介助者に同様の倫理と環境整備を求めているが、医療を窮理、医師を儒医と捉える立場からすれば、この部分は視野に入らない。

### 「依ト加拉得斯略伝」とその典拠

甫賢のこのような医学観はどこから来ているのであろうか。それを解く鍵は、漢文賛の「蘊奥の深微を智め難く、窮まり無くして已む」という一文にある。この表現は山村才助訳・大槻玄沢訂「依ト加拉得斯略伝」(文化四年春成)の甫賢清書本に、

依ト加拉得斯は初め専ら格物窮理を研究し、後殊に人身形驅内外造有の物理を窮め、悉く皆解剖し以て実<sup>ニ</sup>に就き、必ず其の蘊奥を竭して止む。是に医流の基本、解剖

の祖と為る。遂に全書を著し、医道を創立し、医業大成す。(原漢文)

とある一節の傍線部(引用者)の表現を借りて言い換えたものであった。この「依ト加拉得斯略伝」の原典は、「略伝」冒頭に「西士魯乙斯修斯著古今地理人物志第五卷所載」と明記されているところから、Forum Rares Booksのヘッセリントク氏(Laurens Hesselink)の協力を得て調査した結果、A・G・ルイシウス編『総合歴史地理系譜学辞典』(Abraham Georg Luisius, *Het algemeen historisch, geografisch en genealogisch woordenboek*, 's Gravenhage, Delft, 1724-1737, 8 vols.) 第五卷(一七三〇、図6)のHIPPOCRATES項目と判明した。上記の訳文に対応する原文を掲げよう。

In 't begin lei hy zich op het onderzoek der natuur, en naderhand begon hy de gesteltenis des menschlyken ligchaams inzonderheid nauwkeurig te onderzoeken. Hy was de eerste, die vaste regelen omtrent de geneeskunde opstelde.

(逐語訳)

彼は最初、自然の研究に没頭し、のちに特に人体の構造を詳細に研究し始めた。彼は医学に関する基礎的な諸原

H E T  
A L G E M E E N  
H I S T O R I S C H , G E O G R A P H I S C H  
E N  
G E N E A L O G I S C H  
W O O R D E N B O E K ,

VERVATTENDE,  
DE GEHELE WERRELDLYKE GESCHIEDENIS,

In een Verhaal van de Levens van alle de Keizers, Koningen, Keurvorsten, Vorsten, Opperveldheren, vermaarde Krijgshelden, uitmuntende Staatsbedienaren, geleerde Mannen, zynde achter ieder van deze laatsten gevoegt een *Naamlyk van derzelver uitgegevene Werken*; voorts van alle befaamde Konstenaren en eerste Uitvinders van Konsten.

A L S O O K ,

DE GEHELE KERKELYKE GESCHIEDENIS,

In een Verhaal van de Levens van alle de Patriarchen, Profeten, Apostelen, Vaders van de eerste Kerk, Pausen, Kardinalen, Bisschoppen, Prelaten en voornamelyk Godgeleerden, nevens een historisch Bericht van alle de CONCILIIEN en KERKVERGADERINGEN, van het begin tot deze tyd de gehele wereld door gchouden, met een Beschryving van alle de GHESTELYKE WERRELDLYKE ORDERS, derzelver Oorsprong en Instelling, mitsgaders de Levens van derzelver Stichter; en dan eindelyk een Bericht van alle de befaamde KETTERS, derzelver Gevoelens, Leerstukken en voornamelyk Bedryven;

W Y D E R S ,

EEN GEOGRAPHISCHE, HISTORISCHE EN STAATKUNDIGE BESCHRYVING

Van alle de Keizerryken, Koningryken, Vorstendommen, Republiken, Landchappen, Eilanden, Steden, Kloofsters, Gebergten, Rivieren, derzelver Oorsprong, Gelegenheid, Regerings-vorm, Staatsbetier, Godsdiens, Wetten, Zeden, enz. enz.

V O O R T S ,

EEN UITVOERIGE GENEALOGISCHE BESCHRYVING

Van alle doorluchtige, aloude en aanzienlyke GESLACHTEN door de gehele wereld, en van de voornaamste Familien van de ZEVEN VEREENIGDE PROVINTIEN in 't byzonder;

E I N D E L Y K ,

EEN HISTORISCHE EN ZEDEKUNDIGE VERKLARING

En Uitlegging van de Heidenische Fabelen, derzelver Goden en Godinnen, mitsgaders aloude als hedendaaglyche *Schouw- en Renspelen*, merkwaardige Ceremonien, Plegtigheden en Gewoonten; de voornaamste Landwetten, Willekeuren, Ordonnantien en Plakkaten, die in de Geschiedenis van ieder Ryk of Staat voorkomen;

*Alles na de orde van het Alfabet uit de allerbeste Woordenboeken van andere Natien zamengefeld, en met een grote menigte van Artikels, voornamelyk ten opzigt van de Zaken van deze Nederlanden, in gene andere Woordenboeken te vinden, uit echte Berichten en Bewyzen vermeerderd, en door en door met vele gewichtige Ontdekkingen en Aanmerkingen uit de alleruitmuntendste Schryvers, dienende tot ophelving van de Geschiedkunde, Tydrekening en Aartmeet-kunde, verrykt.*

Door A. G. LUISCIUS, Rechtsgel.

VYFDE DEEL.



I N ' s G R A V E N H A G E ,

By J O H A N N E S V A N D U R E N .

M. D. C. C. X X X .

Met Privilegie van de Edle Groot Mog. Heeren Staten van Holland en Westvriesland.

図9 A. G. ルイシウス編『総合歴史地理系譜学辞典』第5巻 標題紙 個人蔵

則を確立した最初の人であった。

これによって、山村才助訳・大槻玄沢訂の訳文は自然研究を「格物窮理」の概念で、また解剖学も人体の「窮理」と把握していることが分かる。玄沢の修訂によって、原文にはない多くの修飾的文辞が加えられ、かえって原意がゆがめられている。甫賢が表現を借りた「蘊奥を竭<sup>7</sup>して止む」は原文の「*naauwkeurig te onderzoeken*」(詳細に研究する)を医聖にふさわしく誇張した表現であった。

### 『重訂解体新書』のクルムス脚注

ヒポクラテスを解剖学、すなわち人体「窮理」の祖として崇拜する考えは、大槻玄沢が寛政八年、『重訂解体新書』(寛政十年・一七九八成)の翻訳中に、原典の脚注を手がかりに敷衍、脚色、修飾を重ねて、ほとんど創作した漢訳ヒポクラテス伝に源流がある<sup>12</sup>。その漢訳は『重訂解体新書』巻五「本編第一翻訳新定名義解上」「解体総括篇第一」「解体科」の条に、本編の「註證」(脚注をさす)に曰く、として挿入されている<sup>13</sup>。

玄沢の創作ぶりを確認するために、クルムス脚注の原文と逐語訳、および玄沢(茂質)の漢訳を対比し、訳文を検討しよう。漢訳は便宜上、訓み下し文を用いる<sup>14</sup>。片仮名の振り仮

名は漢訳原文のままである。□内は、玄沢が加えた主な脚色、修飾部分である。オランダ語原文を訳文において敷衍した部分は原文と訓み下し文の両方に下線で示した。

(クルムス脚注)

*Hippocrates Cois* heeft ons de alderoudste gedenkteecken der Ondleedkunde(1), schoonverspreid in zyn schriften, nagelaten, waar onder meede een byzonder boek van de Ondleedkunde is. Hy heeft in Griekenland 432 Jaaren voor de geboorte van Christus, onder de regering van Perdicas, den tweeden Koning van Macedonien, geleefd, en soude 104. (anderen berigten 109.) jaaren oud geworden zyn. Hem komt nog heede ten dagen met reet de voorrang onder de Genesheeren toel(2).

(逐語訳)

ヒポクラテス・コウスは解剖学の最も古い考察を、その著作中に散在した形で我々に残しているが、そのなかにまた『解剖学について』という独立した章がある。彼はキリスト生誕前四三二年、ギリシアで、マケドニア王、ペルディッカス二世の治世下に生きていた。そして、百四歳(他の人は百九歳ともいう)に達したという。すべての医師中の最高位は、今においてもなお、まさしく彼のものである。

(玄沢訳訓み下し)

【在昔医聖有り。】名づけて依卜哈囉得斯革烏斯と曰う。地中海の内、哥阿斯島に生ず。専ら格物窮理の学を事とす。尤も人身に就いて躬ら其の体を解き、以て内外諸物を格知し、形器の実理を究尽(1)して、【而して道而建て教えを設け、統を垂れ業を創めて、以て恵を後世に貽す。誠にはれ我が欧邏巴洲中医道の開基、解体家の祖師なりと。】茂質嘗て其の小伝を閲す。以て其の捐館の年暦を推すに、今茲寛政八年を浜ること、二千二百二十有八年。実に皇朝孝明天皇四十九年、周の考王の十四年に当たれり。【時より厥の後、医家皆其の遺訓に法り、其の創立を奉じ、賢哲似ぎ続いて、互いに相い祖述して、愈々其の精微を極め、益々其の蘊奥を竭し、】以て今世に至ると云う。竊かに惟るに、医道の妙、治術の精、恐らくは天下其の右に出ずる者無し(2)。【職として是れ解体術、其の宗源を開き、窮理学、其の基本を立つるに之れ由れり。乃ち医聖依卜哈囉得斯の遺恵洪勲なり。豈に以て感戴せざるべけんや。】

原文に「医聖」に対応する言葉はなく、Ontleekkunde（解剖学）を「格物窮理の学」と訳し、「尤も人身に就いて躬ら其の体を解き、以て内外諸物を格知し、形器の実理を究尽」すると原文にない敷衍的説明を加える。

「茂質嘗て其の小伝を閲す」の「小伝」は不明である。玄沢は原文の「キリスト生誕前四三二年」を「捐館の年暦」(没年)と解釈し、「キリスト生誕」紀元をはばかり、「今茲寛政八年を浜ること、二千二百二十有八年」に言い換えている。キリスト紀元前四三二年は寛政八年(一七九六)から確かに二千二百二十八年前であるが、第五代孝明天皇四十九年、周の考王十四年はキリスト紀元前四二七年にあたる。この齟齬の事情は未詳である。

原文のマケドニア王ペルディッカス二世(在位・前四五〇年頃～前四一三)治世下の項とヒポクラテスの享年の項は訳出されていない。

原文「Hem komt nog heede ten daagen met recht de voorrang onder de Geneesheeren toe」(あらゆる医師中の最高位は、今においてもなお、まさしく彼のものである)の「heede ten daagen」(今、現在)の意味は直前の文末「以て今世に至ると云う」に移され、「Hem komt」で始まる倒置文の構造と分離動詞 toekomen が理解されず、「竊かに惟るに、医道の妙、治術の精、恐らくは天下其の右に出ずる者無し」という玄沢自身の言葉に改変している。



3 「依卜加得文章一」に転写された賛の典拠 その(1)

「依卜加得文章一」と題されたこの小冊子は桂川甫賢が天保九年(一八三八)五月に門人二人に描き与えたヒポクラテス肖像画の漢文賛と、肖像画制作の由来書の写しである。表紙の見返しにはその肖像画の摸写が掲げられている。摸写された肖像画と前半の漢文賛は、本稿「はじめに」で述べたように、既知の甫賢自画自賛のヒポクラテス肖像⑥27の肖像および賛とよく符合する。「依卜加得文章一」との題は、冊子の裏表紙見返しに墨書した「香川迪斎主人」(未詳)がヒポクラテス伝記資料を記録した冊子の第一冊を意味すると思われる。

冊子後半の由来書によれば、甫賢は門人大野と井田某(不明)の来訪を受けた。二人は南山老侯(薩摩藩主高津重豪、一七四五〜一八三三)が生前に江戸参府のオランダ人に瓶を託して入手されたというオランダ国の水の入った瓶を差し出し、この水で墨を擦って医王ヒポクラテスの肖像画を描いてほしい、と懇請した。甫賢は「その用意の至り、好尚の厚き」を喜んで、明窓淨机、肅坐して揮毫したところ、墨色燦として神彩渙発。今の人をして自然に崇敬の念を起させ、実に奇なる出来映えとなった。そこで、それまでに記録してあったヒポクラテス伝を抄録し、肖像画に付して二人に

贈呈することにしたという。

以下に「依卜加得文章一」の全文を翻刻し、前半に転写された漢文賛の典拠を考察しよう。漢文賛(白文)は每半葉無界七行に転写され、朱で読点が付けられ、冒頭の固有名詞若干に朱で仮名書きの振り仮名が施されている。朱点は「」で示す。参考のため、訓み下し文を添える。傍線部は後述の典拠「依卜加拉得斯略伝」(文化四年・一八〇七)を利用した箇所を示す。

依卜加得文章一

依卜加得先生者、厄勒齊亞人也、父曰黑拉吉、母曰布拉吉、相伝太古之猛將、黒兎鳩之裔也、曾祖有鄂止石者、既撰述医籍、事見于瓦列奴斯撰書、先生初專攻格物窮理之学、後殊究人身形軀内外造有之理、悉皆即物解剖、明微着実、必竭其蘊奥而止矣、遂其業大成述作典籍以賜于天下万世、実为医家者之祖宗、解剖科之基礎矣、其書言曰、凡為医者宜就諸病、潜心覃思以窮其理也、夫人身之元神意識、能主宰一身、使自運動當為無不如意也、是謂自然之妙道矣、医能明弁此理、随其自然、以施其治、則無有艱阻也、蓋人身之性雖不能無疾疢、然又有活動機轉、而晋々欲自癒、謂曰之人身中之一大良医、医之從之而施治、猶臣僕之供使令、其務不出順自然之性、以処導達闕滯之良方而已、故能預識人身固有之理、而令之順行

直達、則医之能事畢矣、至哉言乎、後之學者誰不遵奉此語也、當時疫癘大行、無処不染者、先生大施治療、救濟至衆、於是西方諸國、尊崇如神、至今稱曰医王云、先生生于歐羅巴革命前四六十年、没于三百七十五年、寿八十有五、有二男一女、長曰達拉哥、次曰貼沙留、女婿曰卜列乙、又有弟子曰塚吉彪、皆共受其業、馳名于時、医王生涯道德功業至多、後世傳之皆以為規則、今録其梗概云、

門人大野井田携清水一瓶□(虫損・共か)告曰、是遠西和蘭国中之水、而南山老疾之所賜也、侯博雅好事若之所悉、曾試諸州之水性、竟及海外、此瓶水託來貢西客、而所得也、今也仙矣、感慨何歇、僕曾請君写医王之像、願以此水磨墨、豈不湊巧乎、余嘉其用意之至、好尚之厚、乃夙興澡洗、明窓之下净机之上、肅坐揮毫、則墨色燦焉、神彩煥發、今人自然起崇敬、不亦奇乎、乃謹抄曾所録医王之伝、付之以贈、時惟天保戊戌端午之日也

江都法眼侍医

翠藍桂国寧 (印・桂国寧) (印・桂氏清遠)

(訓み下し)

依卜加得先生は厄勒齊亜なり。父は黒拉吉と曰う。母は布拉吉と曰う。相伝う、大古の猛將、黒兎鳩の裔なりと。曾祖に鄂止石なる者有り。既にして医籍を撰述す。事、

瓦列奴斯撰書に見ゆ。先生は初め格物窮理の学を専攻し、後、殊に人身形軀内外造有の理を究む。悉皆物に即して解剖し、明徹着実。必ず其の蘊奥を竭して止む。遂に其の業大成し、典籍を述作して以て天下万世に賜う。実に医家なる者の祖宗、解剖科の基礎為り。其の書に言いて曰わく、「凡そ医為る者は宜しく諸病に就き、潛心覃思して以て其の理を窮むべし。夫れ人身の元神意識は能く一身を主宰し、自から運動して營為の不如意無からしむなり。是れ自然の妙道と謂う。医は能く此の理を明弁し、其の自然に随い、以て其の治を施せば、則ち艱阻有ること無し。蓋し人身の性は疾疾無き能わずと雖も、然も又た活動機転有りて、晋々として自ら癒さんと欲す。謂うに之を人身中の一大良医と曰う、医の之れに従いて治を施すは、猶お臣僕の使令に供するがごとし。其の務めは自然の性に順い、処を以て闕滯を導達するの良方を出ざるのみ。故に能く預め人身固有の理を識り、而して之を順行直達せしめば、則ち医之れ能く事畢ある」と。至れる哉、言や。後の學者、誰か此の語を遵奉せざらんや。当時、疫癘大に行われ、処として染まざるは無し。先生大いに治療を施し、救済至つて衆し。是に於て西方諸國、尊崇すること神の如く、今に至るまで称して医王と曰うと云う。先生は歐羅巴革命前四六十年に生まれ、三百七十五年に没す。寿八十有五。二男一女有り。長は達拉哥と曰い、次は貼沙留と曰う。

女婚は卜列ハシ乙と曰う。又た弟子有り。塚吉彪ハシと曰う。皆共に其の業を受け、名を時に馳す。医王生涯の道德功業は至つて多し。後世之を伝うるを皆な以て規則と為す。今其の梗概を録すと云う。

門人大野、井田、清水一瓶を携え□（共に）告げて曰わく、「是れ遠西和蘭国中の水にして、南山老侯の賜う所なり。侯の博雅好事は之く所悉トクすが若し。曾て諸州の水性を試し、竟に海外に及ぶ。此の瓶水は来貢の西客に託して得し所なり。今や仙たり。感慨、何ぞ歎きん。僕ボク曾ち君に請う、医王の像を写せよ。願わくは此の水を以て墨を磨せ。豈に湊巧ならざらんや」と。余、其の用意の至り、好尚の厚きを嘉し、乃ち夙興澡洗、明窓の下、淨机の上、肅坐して揮毫すれば、則ち墨色燦焉、神彩渙發。今人、自然に崇敬の思いを起こさん。亦た奇ならずや。乃ち謹しんで曾て所録する所の医王の伝を抄し、之に付して以て贈る。時に惟れ天保戊戌端午の日なり。

江都法眼侍医

翠藍桂国寧（印…桂国寧）（印…桂氏清遠）

前半の漢文賛は、その原本と思われるヒポクラテス肖像⑥27の漢文賛を分析した緒方富雄（一九七二）が三三六頁で指摘しているように、山村才助訳・大槻玄沢訂「依卜加拉得斯

略伝」（文化四年春成）に依拠しつつ、玄沢が寛政十一年（一七九九）八月に翻訳した「今撥哈拉帖斯伝」（「警水存響乾」「警水漫草」所収）の一部分を加えて、文章を推敲したものである。

「依卜加拉得斯略伝」は前章で述べたように、玄沢門人の山村才助がA・G・ルイシウス編『総合歴史地理系譜学事典』第五卷（一七三〇）のヒポクラテス項目を翻訳し、玄沢が修訂したものであった。「今撥哈拉帖斯伝」はその末尾に玄沢が記すように、「哥兒涅乙吉」すなわちゴットフリート『史的年代記』第一卷（Johan Ludwig Gottfried, *Historische chronick*. Iste deel. Leyden, Pieter Vander Aa, 1698）の口絵銅版図版のヒポクラテス肖像画を入手し、石川大浪に模写させ画幅とした際に、その賛としたものだった。

#### 「依卜加拉得斯略伝」の利用箇所

緒方の指摘を受けて、まず、甫賢が「依卜加拉得斯略伝」（白文、細字双行注あり）をどのように利用したかを具体的に示そう。そのため、緒方富雄（一九七二）図版9によって全文を翻刻し、甫賢が利用した箇所傍線を加え、前掲「依卜加得文章一」の翻刻にも、対応する箇所傍線を付した。これによって、両箇所に対応が明白になったはずである。以下の翻刻においては、読点を私に付け、原本の細字双行注は

【内】に示した。訓み下し中の【】も同様である。訓み下し中のルビも私に付けた。

依卜加拉得斯略伝【士魯乙斯修斯著古今地理人物志第五卷所載】大東 山村昌永訳 大槻茂質訂

依卜加拉得斯【漢訳依卜加得】者、我往古医宗也、世尊之曰不靈斯牒児業涅乙斯協冷【此語此訳云医王】前歐羅巴洲革命四百六十年【年歴考別詳于画像題賛】生哥阿斯島【按哥阿斯島今名蘭鄂地中海多島海中之一島、近于那多里亜海辺】、父曰歌拉吉力牒斯、母曰不拉吉悉玷空、相伝云、太古之歌爾鳩列斯及優斯鳩拉必烏斯之苗裔也【按歌爾鳩列斯者、太古有勇猛之名、嘗戮殺巨蛇獅子及種々異形怪物等云、優斯鳩拉必烏斯者蓋其室人歟】、依卜加拉得斯之遠祖有鄂悉石鳩斯者、既撰述医籍事、見于歹列奴斯【中古名医名】撰書中、依卜加拉得斯初専研究格物窮理、後殊窮身形軀内外造有之物理、悉皆解剖以就実、必竭其蘊奥止焉、是為医流基本解剖科之祖、遂著全書、医業大成矣、当時疫癘大行其郷、是起于伊兒列乙力応【按古国名、謂現今意太里亜及太攀弘河辺黑海近傍之間】之地、多伝患者、依卜加拉得斯療之救済至衆、於是于、当時盛大厄勒祭亜諸国之人、亦皆尊崇而推戴之如神靈云、其事載于旧記諸史、永美拳于世、【按艾儒略職方外紀曰、亜細亜地中海有島百千、其大者一曰哥阿島、曩国人尽患疫、内有名医

名依卜加得、不以藥石療之、令城内外遍大火燒、一晝夜息、而病亦癒矣、蓋疫為邪氣所侵、火氣猛烈能盪滌諸邪尽而疾癒、亦至理也、其没年雖多不審者、扼諸実録攻之、距中興革命之時三百七十六年前、而保寿八十有五也、有二男一女、長曰達拉哥、次曰玷沙留斯、女婿曰卜列乙必烏斯、又有弟子曰垓吉悉彪斯者、皆共受其業、名譽于其世云、依卜医王生涯事業功績永伝于世、名声益甚、

詳見于不力泥烏斯、泄爾修斯、泄涅哈、歹列奴斯、修乙達斯、哈斯玷力空奴斯、達尼乙兒般規列爾古、等諸名哲著撰諸書中

茂質嘗得医王小伝於鳩児模斯解剖書註証中、又得其肖像於哥兒涅乙吉之書、即訳且摸、裝為一幅藏焉、頃門生山村昌永得此説、訳以所見贈、茂質更訂正修辭、併以副其画幅云、文化四年丁卯之春

桂川国寧書

(訓み下し)

依卜加拉得斯略伝【西士魯乙斯修斯著古今地理人物志第五卷所載】大東 山村昌永訳 大槻茂質訂

依卜加拉得斯【漢訳依卜加得】は我が往古の医宗なり。世々之を尊びて、不靈斯牒児業涅乙斯協冷【此語、此を訳して医王と云う】と曰う。歐羅巴洲革命に前んずること四百六十年

【年歴考は別に画像の題賛に詳し】哥阿<sup>ゴア</sup>斯<sup>ス</sup>島<sup>シマ</sup>は今蘭<sup>ラン</sup>鄂<sup>ゴ</sup>と名づく、地中海多島<sup>ヘラキリア</sup>海中の一島なり、那多<sup>ナタ</sup>里<sup>リア</sup>亜<sup>ア</sup>の海<sup>ヘラ</sup>辺<sup>キリ</sup>に近し。父は歌<sup>ヘラ</sup>拉<sup>キリ</sup>吉<sup>アス</sup>力<sup>ス</sup>牒<sup>ス</sup>と曰い、母は不<sup>ヘラ</sup>拉<sup>キリ</sup>吉<sup>アス</sup>悉<sup>ス</sup>謁<sup>ス</sup>空<sup>ス</sup>と曰う。相伝えて云わく、太古の歌<sup>ヘラ</sup>爾<sup>キリ</sup>鳩<sup>アス</sup>列<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>及び優<sup>ヘラ</sup>斯<sup>キリ</sup>鳩<sup>アス</sup>拉<sup>ス</sup>必<sup>ス</sup>鳥<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>の苗裔なり【按ずるに歌<sup>ヘラ</sup>爾<sup>キリ</sup>鳩<sup>アス</sup>列<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>は太古に勇猛の名有り、嘗て巨蛇獅子及び種々異形怪物等を戮殺すと云う、優<sup>ヘラ</sup>斯<sup>キリ</sup>鳩<sup>アス</sup>拉<sup>ス</sup>必<sup>ス</sup>鳥<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>は蓋し其の室人か】。依<sup>ヘラ</sup>卜<sup>キリ</sup>加<sup>アス</sup>拉<sup>ス</sup>得<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>の遠祖に鄂<sup>ゴ</sup>悉<sup>ス</sup>石<sup>ス</sup>鳩<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>なる者有り。既にして医籍を撰述せる事、歹<sup>ヘラ</sup>列<sup>キリ</sup>奴<sup>アス</sup>斯<sup>ス</sup>【中古の名医の名】の撰書中に見ゆ。依<sup>ヘラ</sup>卜<sup>キリ</sup>加<sup>アス</sup>拉<sup>ス</sup>得<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>は初め専ら格物窮理を研究す。後、殊に身形軀内外造有の物理を窮む。悉皆解剖して以て実<sup>ヘラ</sup>に就<sup>キリ</sup>き、必ず其の蘊奥を竭して止む。是れが為<sup>ヘラ</sup>に医流の基本、解剖科の祖たり。遂に全書を著し、医業大成す。当時疫癘大に其の郷に行わぬ。是れ伊<sup>ヘラ</sup>兒<sup>キリ</sup>列<sup>アス</sup>乙<sup>ス</sup>力<sup>ス</sup>心<sup>ス</sup>【按ずるに古国の名、謂うに現今意太里亜及び太<sup>ヘラ</sup>擎<sup>キリ</sup>拉<sup>アス</sup>河<sup>ス</sup>辺<sup>ス</sup>、黒海近傍の間】の地<sup>ヘラ</sup>に起<sup>キリ</sup>こり、患<sup>アス</sup>を伝<sup>ス</sup>ゆる者多し。依<sup>ヘラ</sup>卜<sup>キリ</sup>加<sup>アス</sup>拉<sup>ス</sup>得<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>之<sup>ス</sup>を療<sup>ス</sup>し、救<sup>ヘラ</sup>済<sup>キリ</sup>至<sup>アス</sup>て衆<sup>ス</sup>。是<sup>ヘラ</sup>に於<sup>キリ</sup>てか、当時盛大なる厄<sup>ヘラ</sup>勒<sup>キリ</sup>祭<sup>アス</sup>亜<sup>ス</sup>諸<sup>ス</sup>国<sup>ス</sup>の人亦た皆尊崇<sup>ス</sup>、而して之れを推戴すること神靈の如しと云う。其の事旧記諸史に載せ、永く世に美拳たり。【按ずるに艾儒略の職方外紀に曰わく、亜細亞地中海に島百千有り。其の大なる者、一つを哥<sup>ヘラ</sup>阿<sup>キリ</sup>島<sup>アス</sup>と曰う。曩に国人尽く疫を患う。内に名医有り。名は依<sup>ヘラ</sup>卜<sup>キリ</sup>加<sup>アス</sup>得<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>。薬石を以て之れを療せず。城内外遍く大火もて焼かし

む。一昼夜して息<sup>ヘラ</sup>む。而して病も亦た癒ゆ。蓋し疫の為に邪氣の侵す所、火氣猛烈にして能く諸<sup>ヘラ</sup>を盪<sup>キリ</sup>蕩<sup>ス</sup>し、邪尽きて疾癒ゆ。亦た至理なりと。】其の没年、不審なる者多しと雖も、諸実録に拠り之れを攻むれば、中興革命の時を距つること三百七十六年前なり。而して寿を保つこと八十有五なり。二男一女有り。長を達<sup>ヘラ</sup>拉<sup>キリ</sup>哥<sup>アス</sup>と曰う。次を謁<sup>ヘラ</sup>沙<sup>キリ</sup>留<sup>アス</sup>斯<sup>ス</sup>と曰う。女婿を卜<sup>ヘラ</sup>列<sup>キリ</sup>乙<sup>アス</sup>必<sup>ス</sup>鳥<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>と曰う。又た弟子に埒<sup>ヘラ</sup>吉<sup>キリ</sup>悉<sup>アス</sup>彪<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>なる者有り。皆共に其の業を受け、其の世に名譽ありと云う。依<sup>ヘラ</sup>卜<sup>キリ</sup>医<sup>アス</sup>王<sup>ス</sup>の生涯事業功績は永く世に伝わり、名声益々籍甚たり。詳しくは、不<sup>ヘラ</sup>力<sup>キリ</sup>泥<sup>アス</sup>鳥<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>、泄<sup>ヘラ</sup>爾<sup>キリ</sup>修<sup>アス</sup>斯<sup>ス</sup>、泄<sup>ヘラ</sup>涅<sup>キリ</sup>哈<sup>アス</sup>、歹<sup>ヘラ</sup>列<sup>キリ</sup>奴<sup>アス</sup>斯<sup>ス</sup>、修<sup>ヘラ</sup>乙<sup>キリ</sup>達<sup>アス</sup>斯<sup>ス</sup>、哈<sup>ヘラ</sup>斯<sup>キリ</sup>謁<sup>アス</sup>空<sup>ス</sup>奴<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>、達<sup>ヘラ</sup>尼<sup>キリ</sup>乙<sup>アス</sup>兒<sup>ス</sup>般<sup>ス</sup>規<sup>ス</sup>列<sup>ス</sup>爾<sup>ス</sup>古<sup>ス</sup>、等諸名哲の著撰諸書中に見ゆ。

茂質嘗て医王の小伝を鳩<sup>ヘラ</sup>兒<sup>キリ</sup>模<sup>アス</sup>斯<sup>ス</sup>解剖書の註証中に得たり。又た其の肖像を哥<sup>ヘラ</sup>兒<sup>キリ</sup>涅<sup>アス</sup>乙<sup>ス</sup>吉<sup>ス</sup>の書に得たり。即ち訳し且つ摸し、装して一幅と為して焉を蔵す。頃<sup>ヘラ</sup>る<sup>キリ</sup>門<sup>アス</sup>生<sup>ス</sup>山村昌永、此の説を得たり。訳して以て見る所を贈る。茂質更に訂正修辭し、併びに以て其の画幅に副うと云う。文化四年丁卯の春。

桂川国蜜書す。

ルイシウス『総合歴史地理系諸学辞典』

「依<sup>ヘラ</sup>卜<sup>キリ</sup>加<sup>アス</sup>拉<sup>ス</sup>得<sup>ス</sup>斯<sup>ス</sup>略伝」(文化四年春成)の典拠は前章で部分

的に紹介したように、ルイシウス編『総合歴史地理系譜学辞典』(Abraham Georg Laisius, *Het algemeen historisch, geografisch en genealogisch woordenboek*, 's Gravenhage, Delft, 1724-1737, 8 vols.) 第五卷(一七三〇)のHIPPOCRATES項目であった。本書は訳者山村才助の『訂正増訳采覧異言』(文化元年四月序)巻頭の「引用書目」に見えず、その利用はこの「依卜加拉得斯略伝」以外、管見に入らない。文化四年当時、江戸に新着の舶載書であったようだ。

本辞典は最初のオランダ語版百科辞典として知られ、アルファベット順小項目主義による大型フォリオ版(四一・五×二七・五cm)、全八巻。総頁数は四千五百二十四頁に達する。編者のルイシウス(一六九三―一七四〇年以降没)はドイツのデュースブルク大学、ついでおそらくオランダのライデン大学で法学と歴史を修め、プロイセン王立アカデミー外国会員(一七三四)やプロイセン王国在デン・ハーグ派遣代理官(envoyé)を務めた青年知識人であった。三十一歳から独力で、当時カトリック国フランスで版を重ねていたルイ・モレリー『歴史大辞典』(Louis Morel, *Le grand dictionnaire historique*)の編訳に取り組み、オランダ東東インド関係記事など、既存の他国語版にはないオランダ独自の項目を盛り込んだ本書を刊行した。しかし、刊行の翌年から、同じく

モレリー辞典による、より充実した編訳百科辞典、文人ファン・ホーフストラテン等編『総合歴史地理系譜学批判的大辞典』(David van Hoogstraten et al. *Groot algemeen historisch, geografisch, genealogisch en oordeelkundig woordenboek*, Amsterdam, etc. 1725-1733, 10 vols.)の出版が始まり、苦境に陥った。

ルイシウスが翻訳に使用したモレリー辞典の版種は、以下に検討する「ヒポクラテス」項目のみからの推定であるが、一七一八年版(Paris, Jean-Baptiste Coignard, 1718)のよみである。一七三二年版(Paris, Jacques Vincent, 1732)との間で同項目は、ヒポクラテス伝の記事、十六・十七世紀におけるヒポクラテス著作集の出版記事に変更はみられないが、一七三二年版には一七一八年版にはないフランスにおける『ヒポクラテス箴言集』流行の記事が加えられている。<sup>17)</sup>

#### 蘭仏両典拠からみた「依卜加拉得斯略伝」

ルイシウス辞典「ヒポクラテス」項目のオランダ語文が山村才助と大槻玄沢によつてどのように訳されたのか、そのオランダ語文は典拠のモレリー辞典(一七一八年版)のフランス語文をどのように訳したものか。以下に、三種のテキストを断章ごとに对照させ、考察を加えたい。

「依卜加拉得斯略伝」は細字双行を除いた訓み下し文をテ

キストとし、(略伝)の略号を用いる。断章はルイシウスのオランダ語文を(1)～(7)の七断章に区分し、それぞれに対応する(略伝)および(モレリー)のテキストを対照させ、蘭仏両語には逐語訳を付す。ただし、ルイシウスが蘭訳に際して省略した(モレリー)のフランス語原文はここでは取り上げない。また、蘭仏両語の綴りは原文のままである。

(1) HIPPOCRATES, de prins der geneesheren genaamt, wierd in de 80 Olympiade 460 jaar voor Christus op het eiland Cos geboren. Hy was een zoon van Heracles en Praxithea, en men wil zyn geslacht van Hercules en AEsculapius afleiden.

(逐語訳)

ヒポクラテスは医師の君主と呼ばれ、第八十オリンピアード、キリスト紀元前四百六十年にコス島に生まれた。彼はヘラクリデスとブラクシテアの息子であった。そして人は彼の家系をヘラクレスとエスクラピウスに由来するものとする。

(略伝)

依ト加拉得斯は我が往古の医宗なり。世々之を尊びて、不盡<sup>ブツ</sup>ス牒<sup>デル</sup>兎業<sup>ト</sup>涅<sup>ネ</sup>乙<sup>エ</sup>斯<sup>ス</sup>協<sup>キョウ</sup>冷<sup>レイ</sup>と曰<sup>イハ</sup>う。欧羅巴洲革命に前んずること四百六十年、哥<sup>カ</sup>阿<sup>ア</sup>斯<sup>ス</sup>島に生まる。父は歇<sup>ヘ</sup>拉<sup>ラ</sup>吉<sup>キ</sup>力<sup>リ</sup>牒<sup>デル</sup>スと曰<sup>イハ</sup>い、母は不<sup>ブ</sup>拉<sup>ラ</sup>吉<sup>キ</sup>悉<sup>シ</sup>踏<sup>テ</sup>空<sup>クウ</sup>と曰<sup>イハ</sup>う。相伝えて云わく、太古の歇<sup>ヘ</sup>爾<sup>ル</sup>鳩<sup>ク</sup>列<sup>レ</sup>斯<sup>ス</sup>

及び倭<sup>ユ</sup>斯<sup>ス</sup>鳩<sup>ク</sup>拉<sup>ラ</sup>必<sup>ヒ</sup>鳥<sup>ト</sup>斯<sup>ス</sup>の苗裔<sup>ミョウイ</sup>なり。

(モレリー)

HIPPOCRATE, (Hippocrates) Prince des Medecins, nâquit dans l'isle de Coos. l'une des Cyclades, sous la premiere année de la LXXX Olympiade, & l'an 460. avant J.C. comme l'assure Soranus, qui a écrit sa Vie. Son pere Heraclide étoit descendu d'Esulape, & sa mere Praxithee tiroit son origine d'Hercule.

(逐語訳)

イポクラト(ヒポクラテス)、医師の君主は、その伝記を書いたソラスが確言するように、第八十オリンピアード第一年、紀元前四百六十年に、キクラデス諸島の一つ、コオス島に生まれた。父ヘラクリデスはエスキュラピウスの後裔であり、母ブラクシテアはヘラクレスの血筋を引いていた。

《考察》

『Olympiade (オリンピア紀、オリュンピアス歴年)』の語はハルマ、マーリンの蘭仏辞書には載せないが、当時船載され山村才助も利用していたボイス『新修学芸百科辞典』第八卷(一七七七)『OLYMPIADES』項目には詳しい解説がある。

ここでは参照されなかったようだ。キリスト紀元の訳語「欧羅巴洲革命」は山村才助『西洋雜記』卷之二「西洋中興革命の說」に「一聖主世に降誕す此の王神靈聖徳ありて諸国に教

を施し文運大に開け制度全く備はるを以て遂にその聖王誕生の次年を以て中興革命の元年と称す、「今茲辛酉に至りて凡そ中興革命の第一千八百零一年なり」との説明に基づく。(略伝)の「世々之を尊びて」は玄沢の修飾であろう。

(2) Gnosidicus, een van zyne voorvaderen, had reeds een boek van de breuken geschreven, volgens het gevoel van Galenus.]

(逐語訳)

彼の先祖の一人グノシディクスは、ガレヌスの見解によれば、既に骨折の一書を著していた。

(略伝)

依ト加拉得斯の遠祖に鄂悉石鳩斯ゴシセキユスなる者有り。既にして医籍を撰述せる事、歹列奴斯ガレスヌスの撰書中に見ゆ。

(モレリー)

Gnosidicus, son bisaveul, avoit composé un Livre des jointures des membres & de leurs fractures, comme le dit Galien. On dit qu'Hippocrate avoit été disciple d'Herodicus & d'un Medecin nommé Democrate; qu'il vécut auprès de Perdicas Roi de Macedoine; & qu'il mourut à l'âge de cent & quatre ans.

(逐語訳)

曾祖父グノシディクスはガレヌスが言うように、「四肢の関節と骨折について」という一書を著していた。ヒポクラテスはヘロディクスおよびモクラトスという名の医師の門人だった、マケドニア王ペルディッカスのもとで暮らした、百四歳で没したと言われている。

《考察》

een boek van de breuken は (モレリー) の「『四肢の関節と骨折について』なる一書」の要約にあたるが、(略伝)で「医籍」としたのは breuken (骨折) の意味が分からなかったためか。また、gevoelen (意見、見解) も理解できなかったようだ。ルイシウスは (モレリー) 下線部のみを抄訳し、他の部分を省略している。

(3) In 't begin lei hy zich op het onderzoek der natuur, en naderhand begon hy de gesteltenis des menschlyken ligchaams inzonderheit nauwkeurig te onderzoeken. Hy was de eerste, die vaste regelen omtrent de geneeskunde opstelde.

(逐語訳)

彼は最初、自然の研究に没頭し、のち特に人体の構造を詳細に研究し始めた。彼は医学に関する基礎的な諸原則を確立した最初の人であった。



(略伝)

依ト加拉得斯は初め専ら格物窮理を研究す。後、殊に身形軀内外造有の物理を窮む。悉皆解剖して以て実<sub>ニ</sub>に就き、必ず其の蘊奥を竭して止む。是れが為<sub>ニ</sub>に医流の基本、解剖科の祖たり。遂に全書を著し、医業大成す。

(モレリー)

Hippocrate sadonna le premier à la connoissance du corps humain, & donna le premier des preceptes de Medecine.

(逐語訳)

ヒポクラテスは人体の研究に打ち込んだ最初の人であり、医学の諸規則を最初に教えた人である。

《考察》

(略伝) の訳文は本稿第二章で述べたように、ルイシウスの原文にはない多くの修飾的文辞が加えられている。ヒポクラテスが最初「格物窮理」すなわち自然研究 (*het onderzoek der natuur*) に没頭したというルイシウスの説は(モレリー)に無く、ルイシウスが付加したものである。

ルイシウスの断章(7)の末尾には、(モレリー)が挙げたデュパン『世俗世界史』(*Du Pin, Histoire profane*) に替えて、ダニエル・ル・クレール『医学史』(*Daniel Le Clerc, Hist. de la Médecine*) を参照せよとす。後者 (*Daniel Le Clerc, Histoire de la médecine. Première partie*, Amsterdam,

1723) の第三篇 (*Livre troisième*) 全三十三章はすべてヒ

ポクラテスに当てられているが、ルイシウスの説に符合する記述は見られない。ただ、第二章「ヒポクラテスの哲学」でヒポクラテスの医学思想における自然哲学と医学、推論と経験の密接な関係を論じたあとで、第三章「ヒポクラテス解剖学」に移る構成になっていることが、ルイシウスの記述に影響を与えた可能性がある。

(4) *Hy voorspelde een pest, die uit Ilyen zou komen, 't welk hem zoo beroemt maakte, dat de Grieken hem als een God eerden, gelyk hy ook van alle oude schryvers geprezen word.*

(逐語訳)

彼はイリエンからペストが来ると予言した。そのことが彼を大変有名にしたので、ギリシア人たちは彼を神のように崇敬した。同様にまた、彼はあらゆる古代作家たちから称揚されている。

(略伝)

当時疫病大に其の郷に行わる。是れ伊兒列乙力<sup>イリイリ</sup>の地に起り、患を伝うる者多し。依ト加拉得斯之れを療し、救済至て衆<sup>おほ</sup>し。是に於てか、当時盛大なる厄勒祭垂諸国の人亦た皆尊崇す、而して之れを推戴すること神靈の如しと云う。其の事

旧記諸史に載せ、永く世に美拳たり。

(モレリー)

Il prédit une peste qui survint du côté de l'Illyrie, & envoya de ses disciples par les villes de la Grece, pour soulager ceux qui en seroient attaquez. C'est pourquoi les Grecs lui defererent les mêmes honneurs qu'ils avoient fait à Hercule.

(逐語訳)

彼がペストを予言するや、ペストがイッリュリア地方を襲った。彼はすぐに弟子たちをギリシアの諸都市に派遣し、ペストに襲われそうな人々を安心させた。ギリシア人がヘラクレスに対すると同じ敬意を表したのはこのためである。

《考察》

(略伝) はヒポクラテスの盛名をペストの予言に帰するオランダ語の原文から離れ、ヒポクラテスの患者治療、救済の美拳を称える。ルイシウスはヒポクラテスが門人たちをギリシア諸都市に派遣して人々を安心させたことを(モレリー)から訳出していない。また、(モレリー)では異教徒ギリシア人のヒポクラテスに対する敬意をヘラクレスに比しているが、ルイシウスは敬意の念を信仰に近づけ、「als een God」(神のよう)と言ひ換える。イッリュリアはギリシア北西のアドリア海に面した地方をさす古代の名称である。

(5) Zyn sterfjaar is zeer onzeker, en word van enigen in de 106 Olympiade gestelt. Het waarschylykste is, dat hy in het eerste jaar van de 101 Olympiade, 376 jaar voor Christus geboorte in het 85 jaar zynes ouderdoms gestorven is.

(逐語訳)

彼の没年は実に不確かである。第百六オリンピアードに位置づけるものもある。彼は第百一オリンピアード第一年、キリスト生誕前三百七十六年に八十五歳の年齢で死去したというのが、もつとも真実に近い。

(略伝)

其の没年、不審なる者多しと雖も、諸実録に抛り之れを攻むれば、中興革命の時を距つること三百七十六年前なり。而して寿を保つこと八十有五なり。

《考察》

このオランダ語原文は(モレリー)に対応する文章がなく、典拠不明である。

(6) Zyne zonen waren Draco en Thessalus; zyn schoonzoon Polybius, en zyn leering Dexippus hebben zyne wetenschap voortgezet. Hy heeft vele werken geschreven, te lang om hier te melden.

(逐語訳)

彼の息子はドラコとテッサルスであつた。彼の婿ポリビウスと弟子デクシッパスが彼の学問を継承した。彼は多くの書物を著したが、余りに長くなるので(ここ)では言及しない。

(略伝)

二男一女有り。長を達拉哥ダラゴと曰う。次を跼沙留斯テッサルスと曰う。女婿を卜列乙必烏斯ボレイビウスと曰う。又た弟子に埜吉悉彪斯デキシッパスなる者有り。皆共に其の業を受け、其の世に名誉ありと云う。依卜医王の生涯事業功績は永く世に伝わり、名声益々籍甚たり。

(モレリー)

Il a laissé divers Ecrits, qui sont aujourd'hui admirez de tous les Scavans. Thessale & Dracon, ses fils: Polybe son gendre: & Dexippe son disciple, lui ont succedé dans la science de la Medecine, & ont eu beaucoup de reputation.

(逐語訳)

彼は種々の著作を残した。それらは今もあらゆる学者から称賛を受けている。息子のテッサルスとドラコン、婿のポリビウス、弟子のデクシッパスが彼の医学を継承し、大いに名声を博した。

《考察》

(略伝) のヒボクラテスの二人の息子と婿について、「其の世に名誉ありと云う」の付け足しは偶然ながら、(モレリー)

の仏文と符合する。「依卜医王の生涯事業功績は永く世に伝わり、名声益々籍甚たり。」は原文「Hy heeft vele werken geschreven, te lang om hier te melden.」(彼は多くの書物を著したが、余りに長くなるので(ここ)では言及しない)の原意から離れた、修飾である。レイシウスの原文は、(モレリー)のように十六く十七世紀に出版されたヒボクラテスの著作を長々と紹介はしない、という意味になる

(7) Plinius. 17.c. 37 & 126.c.2. Celsus. Seneca. Galenus. Suidas. Castellanus. Daniel le Clerc. *Hist. de la Medecine.*

(逐語訳)

プリニウス「博物誌」第七卷第三十七章、第二十六卷第二章。ケルスス。セネカ。ガレヌス。スイダス。カステリアヌス。ダニエル・ル・クレール『医学史』。

(略伝)

詳しくは、不力泥烏斯フリニウス、泄爾修斯セルシウス、泄涅哈セネカ、歹列奴斯ガレヌス、修乙達斯シュイダス、哈斯跼力密奴斯カステリアヌス、達尼乙兒般規列爾古ダニエル・クレール、等諸名哲の著撰諸書中に見ゆ。

(モレリー)

Pline. 17.c.37. 126.c.2. Celse. Senecque. Galien. Suidas. M. Du Pin. *Histoire Profane, Tome II.*

(逐語訳)

プリニウス「博物誌」第七卷第三十七章、第二十六卷第二章。ケルスス。セネカ。ガレヌス。スイダス。カステリアヌス。デユパン『世俗世界史』第二巻。

《考察》

ダニエル・ル・クレール『医学史』の著者はスイス人医師 Daniel Le Clerc (1652-1728)。(略伝)が Daniel le Clerc を「達尼乙兒般劫列爾古」すなわち Daniel van Clerc とオランダ人名と解釈した事情は不明である。文化年間に蘭学者が知ることができたプリニウス『博物誌』はキリスト教化された小型本の読み物『五巻本博物誌』(C. Plini Secundi. *Des wijdt-vermaerden Natuurkondigers vijf Boecken*. Amsterdam, Dirck Dircksz., 1662.)のみであった。このプリニウスにはヒポクラテス伝は含まれていない。

デュ・パン『世俗世界史』(Louis Elieus Du Pin, *L'histoire profane depuis son commencement jusqu'à présent*. Anvers, Jean François Lucas, 1717. 2 tomes.)は聖書に基づく世界創造からノアの洪水までの神聖世界史に対し、ノアの洪水以降の神話伝説時代からローマ帝国初代皇帝アウグストゥスまでを記述する教科書の読み物。その第二巻第五章「名医伝」のなかのヒポクラテス記事は一頁にも満たない伝記であり、内容的に(モレリー)の項目より情報量が少ない。ルイシウスが学術的な古代医学史の嚆矢とされるル・クレール『医学

史』に取り替えた理由が分かる。

### 『職方外紀』の「依ト加得」

山村才助訳・大槻玄沢訂「依ト加拉得斯略伝」(文化四年春成る)の細字双行注に、「依ト加得」による「哥阿島」のベスト退治の記事が艾儒略『職方外紀』(一六二三)から引用されている。「職方外紀」は安永天明期から阿蘭陀通詞や蘭学者の間で、海外地理情報の典拠として利用されるようになっていた。

引用された「哥阿島」記事は『職方外紀亜細亜卷之一』末尾の「地中海諸島」冒頭の記事である。本木良永がおそらく安永年間に『職方外紀』を漢籍や蘭書も参照しながら和訳増補したと思われる「万国図説」(内題「万国地里図説」、写本一冊、長崎歴史文化博物館、本木家資料)はこの記事を次のように翻訳している(句読点、濁点を私に付けた)。

亜細亜部ノ地中海ノ諸嶋百十アリ。勝テ数ベカラス。且ツ一統志諸書ニ載スル所ノ付近ノ諸島ハ今ノセズ。一島アリ。哥阿ト名ヅク。此嶋中ニ名医アリ。嘗テ国人疫ヲ患ヘテコト々病。医ハ薬石ヲ用井ズ。城内ヲシテ遍ク火ヲ挙ゲシムルコト凡一昼一夜。火滅シテ病自然ニ癒ユ。蓋シ疫気、火ノ猛烈ニヨツテ一時ニ盪除シ了ルト云。

名医「依ト加得」の名前を省略したのは名医ヒボクラテスの認識がまだなかったためであろう。本木良永はのちに、ゴットフリート『史的年代記』の口絵によってその認識を得たようだ。

「依ト加拉得斯略伝」の訳者である山村才助が『職方外紀』の西洋地名に洋語をあてた「外紀西語考」（大槻文庫本、寛政六年成る）には「哥阿島」の記載がない。のちに『職方外紀』『坤輿全図』両方の地名に洋語をあてた「西語名字考」（京都学・歴史館所蔵、天保三年孟秋上旬長谷川延年写）では、「地中海諸島／Eylanden van Middellandsche Zee／哥阿島／Coo.／「カスパリウス」ノ書ニ見ユ」とあるが、「依ト加得」の記載はない。「カスパリウス」ノ書<sup>①</sup>は未詳である。山村才助が「哥阿島」を認識したのは「依ト加拉得斯略伝」の注釈作業を通してであろう。

ゴットフリート『史的年代記』口絵にルーツをもつヒボクラテス像の銅版画で、宇田川榕菴による一八三九年の欧文署名を刻したものは成立事情がよく分からない<sup>②</sup>。しかし、榕菴自筆『職方外紀』写本（横浜市立大学鮎沢文庫所蔵）の「哥阿島」記事には、「哥阿島」および「依ト加得」の振り仮名が付けられている。蘭学者による「依ト加得」の確かな読み方を伝える意味で貴重である。

#### 4 「依ト加得文章二」に転写された賛の典拠 その(2)

「依ト加得文章一」の漢文賛のうち一つの典拠である、大槻玄沢訳「兮撥哈拉帖斯伝」（寛政十一年・一七九九成）を考察しよう。この伝記は『磐水存響』坤卷（大正元年、大槻茂雄刊）収載「磐水漫草」第三三にみえる。まず、両者の翻刻①②をならべて掲げ、文中に傍線を加えた箇所を比較すると、ほとんど同文といつてもよい。翻刻②の振り仮名は原本のままである。訓み下し文では振り仮名を私に加えた。

##### ①「依ト加得文章一」の漢文賛（一八三八）

依ト加得先生者、厄勒齊亜人也、父曰黒拉吉、母曰布拉克吉、相伝太古之猛将、黒兒鳩之裔也、曾祖有鄂止石者、既撰述医籍、事見于瓦列奴斯撰書、先生初專攻格物窮理之学、後殊究人身体軀内外造有之理、悉皆即物解剖、明徹着実、必竭其蘊奥而止矣、遂其業大成述作典籍以賜于天下万世、実為医家者之祖宗、解剖科之基礎矣、其書言曰、凡為医者宜就諸病、潛心覃思以窮其理也、夫人身之元神意識、能主宰一身、使自運動營為無不如意也、是謂自然之妙道矣、医能明弁此理、隨其自然、以施其治、則無有艱阻也、蓋人身之性雖不能無疾、然又有活動機軸、而晋々欲自癒、謂曰之人身

中之一大良医、医之從之而施治、猶臣僕之供使令、其務不出順自然之性、以処導達關滯之良方而已、故能預識人身固有之理、而令之順行直達、則医之能事畢矣、至哉言乎、後之學者誰不遵奉此語也、當時疫癘大行、無処不染者、先生大施治療、救濟至衆、於是西方諸国、尊崇如神、至今稱曰医王云、先生生于歐羅巴革命前四百六十年、没于三百七十五年、寿八十有五、有二男一女、長曰達拉哥、次曰跖沙留、女婿曰卜列乙、又有弟子曰埵吉彪、皆共受其業、馳名于時、医王生涯道徳功業至多、後世傳之皆以為規則、今録其梗概云、

②「兮撥哈拉跖斯傳」(一七九九) 翻刻

兮撥哈拉跖斯傳 寬政己未八月

【兮撥哈拉跖斯可烏斯者。厄勒齊亞人。在革命大祖前四百三十二年。一百四歲。或曰一百九歲。始立解剖科。以此為医道之基本。其道大行於世。後之學者。莫不以取法焉。奉古訓。遵旧教。伝習研究。歷年之久。而医理益明。以至於大成者。師実為之基也。蓋吾歐邏巴洲。医道中興之祖也矣。可不推戴乎。和蘭医狄古登云。】協速跖廬内科書第五章。載兮撥〔哈〕拉跖斯語。曰凡為医者。宜就諸病。潛意思。以窮其理也矣。夫人之性。有自然之妙道。蓋其元神意識。主宰一身。而能自運動當為。無不如意也。医能明弁此理。隨其自然。以施治。亦何危疑之有。何則人身之性。雖有疾病。有活動機轉。

而能自癒。謂之人身自然之一大良医。医之從其事。猶臣僕之供使令。其務在順其自然之性。以処通達其執滯之良方而已。故能預識人身固有之理。而沈潛苦思。仗其自然之性。順行直達者。此医之能事也。

茂質曰。今茲寬政己未歲。則歐邏巴洲革命大祖紀年以來一千七百九十九年。而師先之四百三十二年。其捐館之年。正与吾人皇第五世孝昭天皇四十四年。周考王九年相当。距今。二千二百三十一年也。余家世修農黃氏之道。而藏二聖図。至今。始從事於遠西之医学。勵精研究經年。其意蓋欲採彼長。以補此短也。書中引師之語。以為口実者。甚多矣。実歐邏巴洲医道中興之祖也。頃得可鹿涅乙吉得前照所描師肖像。神彩如生。使人悚然起敬于二千載之下。九万里之表矣。欽嚮之余。請大浪子。摸写。訳其要語。及所出履歷。以為小伝。題諸其上。以配二聖云。

(訓み下し)

【兮撥哈拉跖斯可烏斯は厄勒齊亞人なり。革命大祖前四百三十二年に在りて一百四歳なり。或いは一百九歳と曰う。始めて解剖科を立て、此を以て医道の基本を為す。其の道大いに世に行なわる。後の学者、以て法に取らざる莫し。古訓を奉じ旧教に遵い、伝習研究して年を歴ること之れ久し。而して

医理益々明かなり。以て大成に至るは、実を師とし、之れを基と為せばなり。蓋し吾が欧邏巴洲、医道中興の祖なり。推戴せざるべけんや。和蘭医狄古登云云えり。】協速跼廬内科書の第五章に兮撥哈拉跼斯の語を載す。曰わく、凡そ医爲る者は、宜しく諸病に就き、潜意覃思して、以て其の理を窮むるなり。夫れ人の性に自然の妙道有り。蓋し其の元神意識は一身を主宰す。而して能く自ら運動嘗爲して、意の如くならざる無し。医は能く此の理を明弁し、其の自然に随い、以て治を施さば、亦た何の危疑や之れ有らん。何となれば則ち、人身の性は疾病有りと雖も、活動機転有り。而して能く自から癒す。之れを謂うに、人身は自然の一大良医なり。医の其の事に従うは、猶お臣僕の使令に供するがごとし。其の務めは其の自然の性に順うに在り。処を以て其の執滞に通達するの良方あるのみ。故に能く預め人身固有の理を識り、而して沈潜苦思し、其の自然の性に仗り、順行直達するは。此れ医の能事なり。

茂質しげたけ曰く、今茲寛政己未歳、則ち欧邏巴洲革命大祖紀年以來一千七百九十九年なり。而して師之れに先ずること四百三十二年。其の捐館えんかんの年なり。正に吾が人皇第五世孝昭天皇四十四年、周の考王九年と相い当たる。今を距つること、二千二百三十一年なり。余家、世々農黃氏の道を修む。而して二聖の図を蔵す。今に至りて、始めて

遠西の医学に従事す。勵精研究して年を経たり。其の意は蓋し、彼の長を採り、以て此の短を補せんと欲するなり。書中引師の語は、以て口実と爲す者、甚だ多し。実に欧邏巴洲医道中興の祖なり。頃ろ可鹿涅乙吉、師を描く所の肖像を得たり。神彩生けるが如し。人をして悚然、二千載の下、九万里の表に起敬せしむ。欽嚮の余り、大浪子に請うて摸写せしめ、其の要語及び所出履歴を訳し、以て小伝と爲し、諸を其の上に題し、以て二聖に配すと云う。

#### 玄沢の漢蘭折衷論

上掲②の傍線部をそのオランダ語原典と比較検討する前に、②の【】を付した部分に注目すると、末尾にクルムス『解剖学図表』の蘭訳者ファン・ディクテンを引いて「和蘭医狄古登云云えり。」とあるように、この部分はクルムス脚注のヒボクラテス略伝が典拠である。本稿第二章で検討した寛政八年（一七九六）の脚注訳と同様、訳文の大半は原文から離れた玄沢の修飾からなる。特に「後の学者」が「古訓を奉じ旧教に遵い、伝習研究して年を歴ること之れ久し。而して医理益々明かなり。以て大成に至るは、実を師とし、之れを基と為せばなり」という文章は原文から甚だしく逸脱し、傷寒論を重んじた日本の古方家の理想像を重ねた記述である。

また、②の後半に玄沢が付した由来書に注目すると、玄沢がクルムス脚注によつてヒポクラテスの「えんかん捐館の年」(没年)と考えた紀元前四三二年の和漢暦への比定は寛政八年のクルムス脚注訳からの再録である。しかし、この由来書で重要なのは、玄沢がヒポクラテスを医聖として崇敬し、その肖像を祭る目的を明確に述べていることであろう。すなわち、採長補短の考えに基づいて西洋医学を家学を採用し、漢蘭折衷の姿勢を自他内外に明示するためである。そのために、玄沢は「可鹿涅乙吉」すなわちゴットフリート『史的年代記』(J. Gottfried, *Historische Chroniek*) の口絵のヒポクラテス像をもとに、石川大浪に医聖ヒポクラテス像を描かせ、先祖伝来の神農黄帝の二聖像と並べて祭つたという。

甫賢がみずから描いたヒポクラテス像の賛に一貫して玄沢の賛を取り込んだことは、甫賢が玄沢の強い影響を受け、その漢蘭折衷論を共有していたことを意味する。

### ゴットフリート『史的年代記』のヒポクラテス記事

玄沢がそのヒポクラテス像を得たゴットフリート『史的年代記』第一巻は門人の山村才助が『西洋雑記』(享和三年・一八〇三頃成る)を著すために使用した吉雄幸左衛門旧蔵の第二版(一六九八年刊、京都大学附属図書館所蔵)に違いない。ゴットフリート『史的年代記』第一巻の口絵は銅版図十

葉からなり、各葉表に二四〜二五人の肖像図を載せる。初版は見開き対照頁に、第二版は裏面に肖像図の解説文(キャプション)を列挙している。第二葉第四図にあたるヒポクラテス像の解説文および本文のヒポクラテス記事を玄沢や石川大浪が認識あるいは利用したか、確証が得られない。初版と第二版の間には以下のように微妙な異同がある。初版(一六六〇)

口絵第Ⅱ図解説文「4. Hippocrates, de treffelijke Arts, en der selver aller Leernmeester。」

(4. ヒポクラテス。名医にして全ての医師の教師。) 本文記事 (p. 137) 「als Artaxerxes regeerden, den alderberoensten Genees-meester, die tot dien tijdt op aerden bekennt gheweeste was, Hippocrates Cous, welkers Schriften noch hedensdaeghs van de Artsen in groote weerde gehouden worden.

(アルタクセルクス治世下にはそれまで地上で知られていたうちで最も有名な医師ヒポクラテス・コウスがいた。彼の著作は今日でもなお医師たちから大いに評価されている。)

第二版(一六九八)

口絵第Ⅱ図解説文「4. *Hippocrates*, een voortreffelijk Genees-geleerde, en *Præceptor* aller



Geneesmeesters.]  
 (4. ヒポクラテス。卓越した医学者にして、全ての医師の師傅。)

本文記事 (col. 231-232) [als Artaxerxes regeerde, d'alderberoemdste Arts, die oyt op den Aerdbodem geweest was, Hippocrates Cous: wiens Schriften noch op den hedigen dagh van de Geneesmeesters in een hooge waerde werden gehouden.]

(アルタクセルクセス治世下にはかつて地上にいたうちで最も有名な医師ヒポクラテス・コウスがいた。彼の著作は今日でもなお医師たちから高く評価されている。)

松浦史料博物館所蔵の初版(一六六〇)の口絵では、ピタゴラス、ヒポクラテス、プトレマイオスの解説文に赤通し(不審紙)が付けられており、阿蘭陀通詞本木良永の痕跡と推定される。

### ハイステル『内科書』のヒポクラテス記事

②「今撥哈拉跼斯伝」下線部の典拠は、文中に「協速跼廬内科書の第五章に今撥哈拉跼斯の語を載す」とあるところから、緒方富雄(一九七一)が阿知波五郎の協力を得て、ハイ

ステル『内科書』すなわち『実用医学綱要』(Laur. Heister, *Practical geneskundige handboek*. Amsterdam, 1761 [ヤマ])に引用された「ゲオルグ・エルンスト・スタール」(Georg Ernst Stahl, 1660-1734)の説(でもなん)とを突き止めた(同書一三二―一三五頁)。本節では、この指摘にしたがって、オランダ語原文と玄沢の訳文とを比較検討する。  
 問題の「協速跼廬内科書第五章」とは、ハイステル『内科書』(一七六二)すなわち、

Practicaal Geneeskundig Hand-Boek, Of Kortbondige, echter volkomene Onderrichting, Om de inwendige Ziektens 't best te geneezen. Door D. Laurentius Heister, Wplen uitmuntende Hoogleeraar in de Genees- Heel- en Kruid-Kunde, op de Hertoglyke Brunswyksche Universiteit te *Helmsstädt*. (...) Uit de laatste Hoogduitsche Drukken vertaald. Te Amsterdam, By Jan Mortterre. (..) MDCCCLXII.  
 (実用内科提要 内科の疾病を最もよく治療するための簡約にしてしかも完全なる教程 高名なる故ブランシュヴィック公国ヘルムシュテット大学内科・外科・薬学教授ラウレンティウス・ハイステル博士著 ドイツ語最新版より翻訳 アムステルダム、ヤン・モルテール書店、一七六二年刊)

の序論「機械論的内科学説の優越性について」すなわち、Verhandeling aangande de Voortreffelykheit en nutstrekendheit der werkingvindinge, of mechanische, Geneeskunde, boven andere leeryzen derzelve. (機械論的内科学の他学説に対する優秀性および卓越性に関する論)の第五章である。第一章〜第五章の章題は次の通り。

第一章「医学における種々の学派と学説について」(Van de Verscheidene Secten en Leergevoelens in de Geneeskunde.)

第二章「機械論的医学とは何か」(Wat de Mechanische of Werkingvindinge Geneeskunde is.)

第三章「シユタール派とは何か」(De Strahlianen, welke die zyn.)

第四章「その基本命題は那辺にありや」(Waar in derzelver Grondstellingen bestaan.)

第五章「シユタール博士の他の命題」(Nog andere Stellingen van D. Stahl.)

ハイステルは第一章で、ギリシヤにおける「経験派」(de Empirische) とヒポクラテスが確立した「合理派」(de Dogmatische) の対立から説き起し、「ドイツ医学界を二分

する機械論派 (de Mechanische) とシユタール派 (de Strahliansche) の対立のなかで、自分は機械論派に属し、「ヒポクラテス派すなわち合理派」(de Hippocratische of redenen gestratde) も機械論派に含めると宣言する。第二章で、神の被造物である人体を多数の小機械からなる極めて精巧な「機械または構造」(Machine (Werktuig) of Gebouw) とするブルハーフェ医学を説明したあと、第三章〜第五章で生気論者シユタールの唱える「生気」(de Ziel) は「自然」(de Natuur) でなべ、「自然」とは「人体の構造」(de Lichamelijke Bouw) であるとの機械論的立場からシユタールを激しく攻撃してゐるのである。

玄沢が「今撥哈拉詰斯の語」として訳出した原文は、この第五章の以下の文章 (pp.11-12) である。

Dierhalven[sic] raden zy ook, nevens Hippocrates aan, dat een Geneesheer dog vooral, by alle Ziekten, wel opletten en gadeslaan moet, waar heen en langs welken weg de Natuur of de Ziel eigenlyk werken wil, en daar moet haar de Medicynmeester onbeschroomd nagaan en volgen: Want de Natuur is de beste Arts, welkers Dienaar slechts is de Medicynmeester; inwoegen hy alleen onder de Artzen den prys behalen kan, welke dusdanige bewegingen op 't

naauwkeurigst gadeslaat, en de Natuur in hare voornemens het best navolgen en bevorderen mag. Deze dan zyn, als ik het niet kwalijk begrepen hebbe, de voornaamste grondstellingen van Stahl en deszelfs Aanhangeren, die hier van de *Stahlianen* worden genoemd, als hunne Leer- en Geneezingswyze hier op voornaamlyk grondende.

(逐語訳)

このゆえにまた、彼ら(シユタール派)はヒボクラテスに付会して説いて曰く、「医師は何よりもまず、どんな病氣においても、自然すなわち生気が實際どの方向へ、また如何なる道をたどつて働きをするのか、よく観察し考察せねばならない。そして医師は決して油断することなく、それを注視し追従しなければならぬ。なぜなら自然は最良の侍医であり、医師はその従僕にすぎないからである。そのため、彼(医師)は侍医の下でしか報酬を受け取れない。侍医はそのような(医師の)一挙手一投足を実に注意深く見守つてゐるのだ。したがつて、自然はその企てにおいて最善を追求し推進できるのである」と。私が理解し損なつていなければ、以上がシユタールおよびここでシユタール派と呼ばれている彼の信奉者たちの重要な基本命題、彼らの学説と治療法が主に基礎を置いている命題なのである。

上掲②「兮撥哈拉跼斯伝」(一七九九)翻刻において傍線を施した玄沢の訳文の成り立ちを分析するため、このオランダ語原文を(1)~(3)の断章に分けて考察を加える。便宜上、玄沢の訳文は訓み下し文を用いる。

(1) Dierhalven raden zy ook, nevens Hippocrates aan, dat een Geneesheer dog vooral by alle Ziekrens, wel opletten en gadeslaan moet, waar heen en langs welken weg de Natuur of de Ziel eigenlyk werken wil.

(逐語訳)

このゆえにまた、彼ら(シユタール派)はヒボクラテスに付会して(nevens)説いて曰く、医師(Geneesheer)は何よりもまず、どんな病氣においても、自然(Natuur)すなわち生気(Ziel)が実際に(eigenlyk)どの方向へ(waar heen)、また如何なる道をたどつて(langs welken weg)働きをする(werken)のか、よく観察(opletten)し考察(gadeslaan)せねばならない、

(訳文)

兮撥哈拉跼斯の語を載す。曰わく、凡そ医為る者は、宜しく諸病に就き、潜意覃思して、以て其の理を窮むるなり。夫れ人の性に自然の妙道有り。蓋し其の元神意識は一身を主宰す。而して能く自ら運動營爲して、意の如くならざる無し。

《考察》

玄沢は *zy* (彼) と Hippocrates を区別せず、シユター  
ル派の主張をヒポクラテスの説と誤解している。 *wel  
opletten en gadeslaan moet* (よく観察し考察せねばならな  
い) を「潜意覃思して、以て其の理を窮むるなり」と訳した  
のはよいが、 *waar heen en langs welken weg* (どの方向へ、  
また如何なる道をたどつて) が理解できず、 *weg* (道) に牽  
引されて「夫れ人の性に自然の妙道有り」と作文したよう  
だ。

この場合「自然」は *de Natuur* の訳語ではない。 *de  
Natuur of de Ziel eigenlyk werken wil* の *Natuur* に「元神」、  
*Ziel* に「意識」の訳語をあべ、「蓋し其の元神意識は一身を  
主宰す」と意識したうえへ、「主宰」の觀念を強調して「而  
して能く自ら運動營爲して、意の如くならざる無し」と補説  
する。

(2) *en daar moet haar de Medicynmeester onbeschroomd  
nagaan en volgen: Want de Natuur is de beste Arts,  
welkers Dienaar slechts is de Medicynmeester:*

(逐語訳)

*そこへ、その際 (daar) 、醫師 (Medicynmeester) は決して  
油断するべからず (onbeschroomd) 、それ (haar) を注視*

(*nagaan*) し追従 (*volgen*) しなければならぬ。なぜなら  
自然 (*Natuur*) は最良の侍医 (*de beste Arts*) であり、医  
師 (*Medicynmeester*) はその従僕 (*Dienaar*) にすぎないか  
らである。

(訳文)

医は能く此の理を明弁し、其の自然に随い、以て治を施さ  
ば、亦た何の危疑や之れ有らん。何となれば則ち、人身の性  
は疾病有りと雖も、活動機転有り。而して能く自から癒す。  
之れを謂うに、人身は自然の一大良医なり。医の其の事に従  
うは、猶お臣僕の使令に供するがごとし。

《考察》

*daar moet haar de Medicynmeester onbeschroomd  
nagaan en volgen* は、まず、「医は能く此の理を明弁し、其  
の自然に随がい」と訳しているが、 *de Natuur* (自然) すな  
わち *de Ziel* (生氣) をさす代名詞 *haar* (それ) の理解がな  
いため、「此の理」と曖昧な訳語で糊塗している。「以て治を  
施さば、亦た何の危疑や之れ有らん。何となれば則ち、人身  
の性は疾病有りと雖も、活動機転有り。而して能く自から癒  
す。」は玄沢が原文にはない「人身の性」(人身本来) の自然  
治癒能力説を導入した補説である。

*Want de Natuur is de beste Arts* (なぜなら自然は最良の  
侍医であるから) において、主語 *de Natuur* はシユター

説では「生氣」(de Ziel)を意味するので、「人身は自然の一大良医なり」は正確な訳ではない。玄沢は(1)において de Natuur を一旦「元神」/ Ziel を「意識」と訳したが、こゝでは自然治癒能力の觀念に牽引されて「人身」の訳語をあてたようだ。

welkers Dienaar slechts is de Medicynmeester (医師はその良医の従僕にすぎなう) は welkers Dienaar (その良医の従僕) の関係代名詞を無視したため、「医の其の事に従うは」といふ曖昧な訳語に終わっている。

(3) invoegen hy alleen onder de Artzen den prys behalen kan, welke dusdanige bewegingen op 't nauwkeurigt gadeslaet, en de Natuur in hare voornemens het best navolgen en bevorderen mag. Deze dan zyn, als ik het niet kwalvk begrepen hebbe, de voornaamste grondstellingen van Stahl en deszelfs Aanhangeren, die hier van de *Stahlianen* worden genoemd, als hunne Leer- en Genezingswyze hier op voornaamlyk grondende.

(逐語訳)

そのため (invoegen) / 彼 (医師) は侍医の下でしか (alleen onder de Artzen) 報酬 (den prys) を受け取れなう。侍医はそのよくな (dusdanige) (医師の) 一挙手一投足

(Bewegingen) を実に注意深く (op 't nauwkeurigt) 見守っているのだ。したがって (en) / 自然 (de Natuur) はその企てにおいて (in hare voornemens) 最善 (het best) を追求し推進 (navolgen en bevorderen) てくるのである (訳文)

其の務めは其の自然の性に順うに在り。処を以て其の執滞に到達するの良方あるのみ。故に能く預め人身固有の理を識り、而して沈潜苦思し、其の自然の性に仗り、順行直達するは。此れ医の能事なり。

《考察》

「其の務めは其の自然の性に順うに在り」は原文から離れた補足。訳語「其の自然の性」は「人身の性」の意味であつて、「自然 (de Natuur) の性」ではなう。「処を以て其の執滞に到達する」はオランダ語原文「op 't nauwkeurigt gadeslaet」(実に注意深く見守る) を誤訳した結果なのか不明である。この断章の訳文は原文から離れ、人身の「自然の性」に従うべきとする「医の能事」を重ねて強調した文章であろう。玄沢は原文(3)の下線箇所をまったく無視したため、ハイステルが要約したシュタール派の学説を「兮撥哈拉跼斯の語」と信じたことになる。

## おわりに

以上、四章にわたって、将軍家侍医桂川家六代桂川甫賢の  
新出資料二種、「医聖依卜加得像」および「依卜加得文章一」  
の賛の成立過程をオランダ語原文、さらにはフランス語原文  
にさかのぼって検討した。その結果、甫賢の医聖ヒポクラテ  
ス観は圧倒的に大槻玄沢がオランダ語原文をなぞりながら、  
多くの場合原文から離れて、修飾的文辞を重ねて創出した医  
聖観をそのまま受け継いだことが明らかになった。唯一、玄  
沢の影響が及ばないかに見えたブランカールト訳『ヒポクラ  
テス箴言集』ゲント版（一七九二）による蘭文賛において  
も、Het leven is kort, de konst lang.（命は短く医術は長く）  
を De konst lang, het leven is kort.（医術は長く、命は短い）  
と語順を逆転させ、「道長生短」（道は長く生は短し）と漢訳  
し、玄沢の影響のもとに、ヒポクラテス医学を格物窮理の概  
念で理解した。

典のモレリー『歴史大事典』（一七一八）のヒポクラテス項  
目にはないものだった。玄沢はこれを朱子学的な「格物窮  
理」と訳すことよって、ヒポクラテスを西洋的儒医の祖師  
と捉えることができた。

そして、玄沢は機械論者ハイステルが生気論者シュタール  
の学説をヒポクラテスに付会する説として批判的に要約した  
文章のなかに、「自然（すなわち生氣）は最良の侍医であり、  
医師はその従僕にすぎない」という格言的表現を見出し、こ  
れをヒポクラテスの教えと誤解し、さらに、これを原文から  
離れて、「人身は自然の一大良医なり。医の其の事にしたが  
うは、猶お臣僕の使令に供するが如し」と誤訳した。この解  
釈は玄沢と交流した京都の漢蘭折衷医小石元瑞に継承され、  
玄瑞は岸成章のヒポクラテス像に「聖の言に曰く、人身に良  
医有り、医は則ち良医の臣僕なり」（原漢文）との賛を書き  
入れることになる。

儒医大槻玄沢が採長補短の理論で西洋医学を単に家学に導  
入するためだけでなく、西洋医学を社会的に認知させるため  
には、医聖ヒポクラテス像に西洋的儒医の祖師である旨の賛  
を入れ、漢蘭折衷の医学界に流布させる必要があった。玄沢  
はその必要性から船載蘭書のなかに見出したヒポクラテス伝  
のわずかな文章を手がかりに、原文から離れた修飾を幾重に  
も重ねたヒポクラテス伝を創作したのである。その肖像画の

画者として初期には石川大浪がいた。そのあとを継承したのが、漢蘭両語に通じ、画者と賛者を兼ねることが出来た桂川甫賢であった。

【謝辞】

本稿の成るにあたって、新出貴重資料の調査研究と写真掲載をお許しくださった衆星堂主人梅村茂樹氏に、また、筆者の求めに応じて貴重文献の情報を提供してくださった Forum Rare Books 主人 Laurens Hesselink 氏に、厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 岡村千曳(一九五三)『紅毛文化史話』(創元社)の口絵43に、文化七年(一八一〇)、甫賢筆コンテテ画十四歳の作「ヒポクラテス像」(著者蔵)を掲げる。ヒポクラテス像と断定はできないが、その可能性は高い。
- (2) 緒方富雄(一九七二)『日本におけるヒポクラテス賛美』(日本医事新報社)に紹介されているカリフォルニア大学サンフランシスコ医学センター図書館所蔵摸写本(Oriental Collection: 4336)は肖像も蘭文賛(クルムス脚注の転写)も甫賢の真筆でなく、成立年、成立事情と

もに不明のため、ここでは省略した。

- (3) ラテン語の箴言「Ans longa vita brevis」は一八二〇年一〇月二二日(文政三年九月一六日)にオランダ商館員のフィッセル(一等書記)らが素人芝居を出島で上演した際、座名に採用された。明らかに「芸術は長く、人生は短い」の意味である。長崎奉行筒井政憲の命を受けてこの舞台を描いた川原慶賀の芝居絵には舞台の横幕に「ARSLONGAVITABREVIS」の文字が記されている。慶賀や筒井奉行、芝居を観た出島の日本人(用人・検使・町年寄)たちがその意味を教えられたかどうか、不明である。松田清(二〇二〇)「桂川甫賢筆長崎屋宴会図について」(『神田外語大学日本研究所紀要』一二号)、二二三頁、一七〇頁(注九〇)、参照。

- (4) マーリン『仏蘭辞典』(一七九三)には、「Oracle」項目に Les aphorismes d'Hippocrate sont des oracles dans la médecine. *De kortbondige spreken van Hippocrates zyn orakels in de geneeskunde.* また「Aphorisme」項目に Les aphorismes d'Hippocrate. *De konstregels, de kortbondige spreken van Hypocrates.* の例文が見える。

- (5) 初版 (Amsterdam, Jacob van Royen, ca. 1680) UB Amsterdam 01 1071 0969 :

- [https://books.google.de/books?id=jRdiAAAcAAJ&hl=nl&source=gbs\\_book\\_other\\_versions](https://books.google.de/books?id=jRdiAAAcAAJ&hl=nl&source=gbs_book_other_versions)
- 第一版 (Amsterdam, Nicolaas ten Hoorn, 1714) UB Amsterdam[\*6A-H 1216]:  
[https://books.google.co.jp/books?id=YxZiAAAAcAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_summary\\_r&cad=0](https://books.google.co.jp/books?id=YxZiAAAAcAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_summary_r&cad=0)
- および電子版 [https://www.dhnl.org/tekst/hipp003apho02\\_01/hipp003apho02\\_01.pdf](https://www.dhnl.org/tekst/hipp003apho02_01/hipp003apho02_01.pdf) 参照。
- (6) ゲント大学図書館所蔵 Universiteitsbibliotheek [196E28]: [https://books.google.co.jp/books?id=mX1FAAAcAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0](https://books.google.co.jp/books?id=mX1FAAAcAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0) 参照。
- (7) 今泉源吉 (一九六八) 『桂川家の人々』【続篇】(篠崎書林) 四二二頁、参照。
- (8) 松田清 (一九九八) 『洋学の書誌的研究』(臨川書店) 一〇八頁、参照。
- (9) Universiteitsbibliotheek Leiden / 608 B.  
[https://books.google.co.jp/books?id=KBNL:UBL000035125&redir\\_esc=y](https://books.google.co.jp/books?id=KBNL:UBL000035125&redir_esc=y)
- (10) 「依下加得略伝」のタイトルは第一冊表紙の目次による。松田清 (二〇一八) 「若林正治コレクション」蘭学資料目録 (補正版)」  
[https://kuis.libguides.com/ld.php?content\\_id=43054130](https://kuis.libguides.com/ld.php?content_id=43054130)
- 五〇頁、D182 「蘭書抜粋録」参照。
- (11) 緒方富雄 (一九七二) 図版9 および一二三頁の翻刻、参照。
- (12) 緒方富雄 (一九七一) 一〇二頁「クルムスの原文とくらべて気がつくこととは (中略) 翻訳にしては、きわめて自由であることです。原文は半分も訳さず、一方、玄沢自身の注がくわわっているのですから、なかば玄沢(しげかた)の書いた注釈ともいえますし、」参照。
- (13) 漢訳の原文は京都大学附属図書館所蔵『重訂解体新書』(文政九年丙戌秋七月刻成、江都日本橋通巻丁目、須原屋茂兵衛他、医学博士鈴木文太郎寄贈本)を参照した。
- (14) 漢訳中の擡頭は無視した。
- (15) 桂川甫賢の門人清水周意。今泉源吉 (一九六八) 三二二頁、参照。
- (16) Ina Ulrike Paul, «Enzyklopädien der Aufklärung in europäischen Vernakularsprachen und der Wissenstransfer über „Modell, Imitation und Kopie“», *Cahiers d'Études Germaniques* [online], 72/2017. および Forum Rare Books 書店主 Laurens Hesselink 氏の教示



に於て。

(17) ルイシウスはモレリー辞典「ヒポクラテス」項目の翻訳にあたつて、ヒポクラテス著作集関連の記事を省略している。一七三二年版モレリーで追加された『ヒポクラテス箴言集』関係の記事は次の通り。Il y a aussi un nombre prodigieux de commentaires sur divers livres d'Hippocrate, dont les aphorismes sont encore aujourd'hui regardés comme des oracles, ainsi que ses prognostics. Feu M. Devaux celebre chirurgien, a donné une traduction françoise des Aphorismes, & du commentaire latin que M. Hecquet habile medecin, a fait sur cet ouvrage. (また、種々のヒポクラテス著作に関して驚嘆するほど多数の注釈書がでているが、その著作のなかで箴言集は診断書同様、今日なお神の託宣のように見なされている。有名な外科医の故トウヴォーは良医エケ氏のラテン語による注釈付きで『箴言集』のフランス語訳を出版した。)このフランスの状況はオランダにおけるオランダ語版箴言集の出版(一七一四、一七三七)と同じく、当時のヒポクラテス復興の現象と思われる。))で話題のフランス語訳は Les aphorismes d'Hippocrates expliquez conformément au sens de l'auteur. Traduction françoise [By Jean Devaux] sur la

version latine d'un auteur anonyme [Philippe Hecquet], Paris, D'Houry, 1727, 2 vols.

(18) 本木家資料の「万国図説」の該当箇所は虫損と綴じ目のため、部分的に解読不可能な箇所がある。引用に当たつて、同書の増注筆写本である「万国地里図説」(京都大学附属図書館室賀文庫所蔵)によつて補つた。

(19) 山村才助が『訂正増訳采覧異言』の「引用書目」に挙げる「和蘭『カスパリウス。ハン。デン。エンデ』撰」「拂郎察釈辞書」よなわち Casparus van den Ende, *Le Gazophylace, De La langue Françoise et Folamende*, Rotterdam, 1654, は該当しなく。「Coo」の綴りが誤写

によるものか、山村才助がのように綴つたのかの判定は「カスパリウス」ノ書」の判明を待たねばならない。  
(20) 緒方富雄(一九七二) 図版43および一六〇〜一六二頁、参照。

(21) 『警水存響』坤巻、七五〜七七頁に掲載。ただし、原本において、人名「狄古登」「協速跼廬」「兮撥哈拉跼斯」「可鹿涅乙吉」に付けられた傍線は無視した。

(22) Universiteitsbibliotheek Amsterdam [OTM:O 62-7873]:  
<https://books.google.co.jp/books?id=ETxmAAAAcAAJ>  
&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\_ge-

summary\_r&cad=0参照。

(23) 緒方富雄 (一九七一) 図版**60** および **62**、参照。